

何程問ねても返辭を爲ないのみならず、疑はしい容子があつたから、お前の名譽を思ふて離縁したと……恚う言つて遣れば、いくら好た女でも、何故黙つて離縁したかとは豈夫に言はないであらうちやありませんか、何と思ひなさいます」

と、兩人を見た。お濱は無言のまゝ、小林が何と言ふであらうかと、小林の顔のみ眺めて居る。

「然うさね、それならば離縁爲たからつて決して無理とは思へないだらうよ、では然う言ふ理由で離縁した事に極て認める事に爲やうかね」

「母様如何です、それで可いでせう」

勝子がお濱の同意を求めた

「其邊の事はお前方に任せるから、何となりと宜いやうに書て遣つて下さい」

其處で遂に照江が道ならぬ行爲を爲たやうに、痕跡も無い事實を認めて關が許へ送つた。

(六十)

照江は離縁を宣告された日から、良人の事小兒の事、越方行末の事など、それよりそれと思ひ回らして、間がな隙がな悲嘆の涙に沈むのであつた。が、姉思の國男が、我身の不幸と同様に、いと懇に辭を盡して慰さめるので、悲讙の中にも少に慰安を得て父の上京を待のであつた。

すると三日目の午前十時頃であつた。一人の車夫が空車を輓いて、一封の書面を持つて來たから、國男が受取つて宛名を見れば、父の五郎から照江に寄來したのであつた、驚きながらも、何となく力を得た心もするので、勇むで照江の室へ待つて往つた。

「姉様、父様が上京なすつたと見えて、お手紙をお寄來しなすつたんですよ」

書面を出した。

「え、ッ」

照江も驚いて、手早く書面を披いた、書面には左の如く認めてあつた。

唯今着京致候、訪問前一應面會致度要件有之候條、差遣し候車にて直様御出可被成候

讀み了つた照江は、待焦れた父ながら、嚴な顔で叱責される如き心地もするので、今更ながら胸を轟かすのであつた、

「それぢや、直に支度して往くから、車夫に暫時く待つて居て貰つて下さい」

「はい」

と答へて、國男は玄關へ出て、車夫を慰勞ふて暫時待つべき旨を告げた。

照江は直にお濱の室へ往つて、

「國から父が上京致しまして、いづれ後刻伺ひますけども、私に會たいから直に宿元まで来るやうにと、迎の者を寄越しましてございますから、些とお遣りなすつて下さいまし」

離縁されながらも、禮儀正しく伺つた。お濱は父親の上京と聞いて、色には見せなかつたが、心中には穩かならぬ波動を起した。

「何の遠慮が要るものか、往つて來なざるが宜い」
いつになく快く挨拶した。

「では、失禮致します」

照江は我室へ入ると、先づ雪子の衣服を更めさせ、續いて自分も華美な透綾の單衣に紋博多の單帶を締めて、解れかゝつた束髪を結び直す暇もなく、鏡臺に對して少く梳上げたまゝ、雪子連れて玄關へ出た。心利きたる國男は、姉と雪子の履物を揃へて待つて居た。

「おや、履物まで出して下れたの……憚り様ね。それぢや往つて來ますから、お前留守居を頼みますよ」

「往つてらつしやい、留守は大丈夫です」

「車夫さんお待せして濟なかつたのね」

優しく辭をかけた。

「何う致しまして」

照江は雪子と共に俥に乗つて、父の宿泊して居る、赤坂田町の對翠館へ往くのであつた。が、結婚の當時父に諭された辭が、今尙耳に在るので、定めて不機嫌の顔を見る

であらうと、會はぬ先から胸を痛めるのであつた。ために瘦衰へた顔は一層色が沈んで病める人となり見えぬのである。

俚は程なく對翠館へ着いた。

(六十一)

仙波大佐は、照江離縁の電報を手にするや勿皇行李を整へて、其夜の中に上京の途に就いた。而して成るたけ園村家へ近い場所へ宿を定めたいと言ふので、遂に紀尾井町へ程遠からぬ、田町二丁目の對翠館へ宿泊する事に爲たのである。

大佐は半白の頭髪を五分刈にして、眉が秀で、眼の大きな、鼻の高い、輪廓の豊かな長面で、背が高い上に肥満した軀で、年齢は五十一である。日露戦争の際は、聯隊長として東北の健兒を率ゐて滿洲の野を馳驅し、勇猛の譽敵味方に高かつたが、凱旋後勳功に依つて功三級に叙して金鷄勳章を授けられ、昨年の春豫備役に編入されて、現今は郷里金澤に歸つて、悠々風月を友とし送つて居る。武事は固より文事にも長けて、所謂花も實もある良將校である。

上布の衫の上に、縞の五つ紋附の羽織を着て、眞白の縮緬の兵兒帯を締めて居る。眼前に山王社頭の翠岱を眺望すべき、樓上の一室に座して、卷簾を喫しつゝ照江の來るを待受けて居る。ところへ照江は館婢の案内で室の入口まで來た。

「憚り様でした、もう知れましたから宜ごさいますよ」

館婢へ挨拶した。

「左様でございますか、それでは失禮致します」

館婢は其まゝ階下へ去つた。室内では大佐の咳の聲がする。照江がこの瞬間の心地は萬感胸に迫つて、そのまゝ死ぬるものなら死んで了ひたいほどにも思つた。雪子は未知家へ來たので、柔順に母の袂へ絶つて居る。顛へる軀、波立つ胸は、容易に靜るべくもないから、照江は密と襖の引手に手を掛けて、漸く開けた、而して雪子の手を引いて室内へ入つて、又靜に閉めた。が、室内へ入つた照江は、父の顔を見ると、挨拶する勇氣もなく、ワツとばかり泣き伏して了つた。雪子も母が泣き出したために、唯理由もなく泣き出した、照江は父に濟まないと思ふて、落つる涙を拭きあへず、無言

のまゝ雪子を引寄せて、轟と抱締めた。大佐は見るに堪へぬがやう、やゝ俯目になつて巻蓑を喫して居た、照江は雪子を宥め賺した後、漸く涙を押へて、

「お父様、何とも申理がありません、どうぞ堪忍なすつて下さいまし……」

曇り勝なる聲に言つて、又はらくと涙を零すのであつた。大佐は有繋に軍人だけあつて、嚴乎な調子で、

「泣くな、泣いて事が分るか、それより早く離縁された理由を話せ、何う言ふ都合があつて離縁されたのぢや、一應お前から理由を聞かなきゃ、園村へ往つても挨拶に困るのぢや」

問ひかけて、熟と照江の顔を噴めた。照江は雪子に乳を與へながら、ハンケチに涙を拭いて、

「離縁されたに就きましては、種々事情がございますけれど、日外書面で申上げました通り、園村が欧州へ赴任爲ますに就て、私共ばかりでは不在中が案じられると申しまして、園村から母様を留守居に來て頂いたのですが、何う言ふものですか上京な

すつた當時は、田舎氣質の至つて良い方のやうに思ひましたけれど、園村が赴任して十日ばかりも経つた頃から、漸次無理を仰やるやうになりました……後には私の方から親切にすればするほど、お憎しみなすつて、何を爲てもお小言仰やるので、全で針の筵にでも座つてるやうな心が致しました」

訴へるべき唯一の同情者を得たので、聲は涙に吃して、幾度か絶勝であつた。

(六十二)

照江は姑の無情を語るべく辭を繼いだ。

「彼是する中に、儉約爲なきやならないと仰やつて、魚や肉類を一切食へない事に爲すつてから、もう四ヶ月からに成りますけれども、野菜ばかり食べさせてるものですよ……この兒などは、時々魚類が食べたい、食べたいと喧しく迫みますけれども、母様に言へば、又お御言仰やるに極つて居ますから、卑しい量見だとは思ひましても、母様がお出掛になると肉や魚を買まして、この兒なり國男なりへ、内々で食べさせて居りましたが、暫くすると、這度は私が主管つて居た宅の經濟を、自分

で行ると仰やつて、持つて居たお金子を、残らず奪つてお了ひなすつたから、小兒にお菓子一つ買つて遣る事も、自由に能なくなりまして、偶々お菓子を買つて遣りたいからと、お願ひすれば、小兒に間食は身のためにならないと仰やつて、僅少のお金さへ下さらないものですから、止を得ず、見るに見かねて苦しい算段をして、内々私が買つて食べさすやうな状態ですから、國男は何うか寄宿舎へ入れて了はうと思ひまして、其事を度々勧めましたけれど、私が母様に没義道な取扱を受けてるのを知つてるもんですから……旨い物なぞ食べたかアないから、是非私の傍に置いて下れと、何と言つても承容れませんので、私も力になるものですから、其儘一緒に居るは居りますけれど、眞箇可愛相で堪らないんです、すると甚麼無理を仰やつても、唯はいくくと柔順に聞てるものですから這度は私を困らさうと思ひなすつて……一人でも足りないほどに思つてる、下女を召使はないと仰やつて、暇を出してお了ひなすつたんです、ですからこの小兒のお守を爲ながら、下女の代を爲なきやならない事になりましたから、早朝から夜の十時頃まで……彼や是やと働き通に働

いて居りますから、時に依りますと……五日も六日も……髪も結はない事があるほどで……近頃では何程か馴れましたけども、下女の居なくなつた當座は、それはく苦しくて、小兒は母様々と迫み立てます、母様は手が無いと知りつゝ些細な用向にまで、照江々々とお呼になる、臺所の用向は爲なきやならないし、何の因果で這麼苦を爲なきやならないかと、熟々悲しくなりまして、日々毎日涙の絶間は無かつたのです。それでも、園村へ那樣事を一々言つて遣つて、心配爲せるも氣の毒だと思ひまして、能得るだけの辛抱爲やうと、我慢に我慢を重ねて今日まで辛抱爲抜いて参りましたから、御覽下さい……手の指なぞは、全然下女同様に荒れて了ひます……か、體も、こ、這麼に瘦せて了ひましてございます」

涙は止度なく溢れ落ちる。大佐は照江の物語を聞きながら、先刻より熟と姿を眺めて居たが、會ては見る人毎に賞め稱へられた香はしい花の容貌が、見る影もないまで色褪せて、別人かとも思はるゝほど變り果て居るので、聞くにも勝る氣兼苦勞を嘗めたであらうと、不覺に同情の念に堪へぬのであつた。

六十三

「姑と仲の悪い點は解つたが、離縁された原因は何う言ふ理由だ、何か著しい不都合な事を爲たのだらう」

大佐の聲も沈むで居た。

「いえ、何も不都合と申すほどの不都合を爲た覺はありませんけれど、八郎叔父様が、大變困る事が出来たから、お金を少し都合して下れないかと、私へ宛ててお手紙をお寄來しなすつたから、直にお断の返書を差上げましたら、其翌日突然訪ねて入來したのですが、丁度其日は母様は姉様の宅へ往らして御不在だし國男も爲替を受取に往つた留守でしたから、私の室へお通し申して、用向を伺ひましたらば、委托金費消とかで、五十圓のお金が無ければ、告訴されなきやならないから、是非三十圓だけどうか爲て下れと仰やるのですけれど、私も日々のお小遣錢を、自分で都合してはど苦しい折柄だもんですから、逆も三十圓と言ふ纏つたお金が出来やう道理がありませんから、事情を打明けてお断り爲ますと、それでは出来るだけ都

合して下れと、何とお断り爲てもお歸りなさらないから、止を得ず十圓だけ都合して差上げましたが、其金を渡して居る處へ、母様がお歸りなすつて、私の室を覗いて其事を御覽なすつたまふ、妙な顔して御自分のお室へ入つてお了ひなすたものですから、直に叔父様に歸つて頂きまして、母様のお室へ往つて見ますと、大層御立腹のお様子で、私が怪い男を引入れて、道ならない事でも爲たやうに、勘違をなすつたと見えまして、種々な事を仰やいますから、始は叔父様と云ふ事は、飽まで隠す意で居ましたけれど、言はなければならぬ羽目に成りましたから、到頭打明けて了つたのです。すると這度は叔父様なら叔父様でも宜いが、叔父様にお金を何がために渡したかと仰やるのです。けれども、叔父が貧困に暮して居て、金の無心に來ましたとは、如何にも面目無くて言へないもんですから、何と答へたものか知らと、お金を渡した返答に窮つてますと、那樣に言悪いお金ならば、強て聞かなくつても宜いが、其代り小若い男を室に引入れて、言譯の能ないお金を渡すやうな嫁は、園村の家の家風に合はないから、今日限り伴に代つて離縁するから、叔父様が在るな

らば、叔父様の家まで引取つて下れと仰やつたのですが、叔父様とは往來してはならないと、豫々仰やつたお辭があるものですから、國から誰かに迎に來て貰ひますから、三四日待つて下さいました、貴父のお越下さるのばかりお待申して居りましてございますが、豫てのお辭に背きまして、叔父様と文通致しまして、それがために、恚う言ふ騒を起しましたのは、私が不調法でございますから、幾重にもお詫致しますけれど、私はお辭を守つて居りましたも、叔父様の方から訪ねて入來つしやるから、止を得ず面會爲たのですから、どうぞ御勘辨を願ひます」

離縁された一伍一什の理由を物語つた。大佐は一々耳を傾けて聞いて居つたが、聞終ると共に、

「それでは何か、八郎が金の無心に來たのを、怪しく疑つて離縁されたのぢや喃」

念を押した。

「は……い」

六十四

「外に離縁されるやうな不都合は無いのぢや喃」

重ねて念を推した。

「は……い」

照江は判然と答へた。大佐は暫時無言のまゝ考へて居たが、やがて何事か決心した如き状態で、

「離縁すると言ふのを、頼むで見たとところで、それならばと承知も爲まいから、引取れと言ふなら引取もするが、しかし、這度の離縁に就ては、園村は無論知らないだらうね」

「はい、園村は何にも存じないんです」

「で、お前から離縁された顛末を認めて、園村の所へ書面でも出したのか」

「いえ、まだ貴父へ御相談した上と考へまして、何事も知らさないでございます」

「然うか、それならば私が姑に會つた上で、左も右極る事に爲るが可い。して國男は何うして居る」

「國男は唯今も申しますやうに、私が苦勞するのを見まして、非常に心配爲ますから若も勉強の方に影響爲てはと思ひまして、寄宿舎なり、他の相當の下宿なりへ、轉らせやうと思ひまして、度々勧めましたけれど、私の體が漸次衰弱するのを見まして、何と勸めても承容れないのみならず……下女が歸りました後は、私が氣の毒だと言ひまして……拭掃の手傳からお買物にまで往つて下れまして、それはく一方ならぬ親切を盡して呉れますから、苦しい中にも甚麼に方に成つたか知れないんでございます……若も國男とこの小兒が居なかつたれば、私は疾に病氣の床に就いて、今頃は何うなつて居たか知れないと思ふのでございます」

「では避暑旅行にも出掛けないで、また園村に居るんだね」

「はい、那樣事を言つて居ます中に、私が恚う言ふ事に成つたものですから、心配ばかり爲まして、まだ園村に居りますのでございます」

「然うか、それでは私は後刻出向く事にするから、お前は直に歸つて往くが可い」

「はい……」

と、力無い返辭を爲たが、靜に大佐の顔を見上げて、

「私父様へ、折入つてお願があるんですが、姑のお氣に入らなくて、離縁されるのは、自分の不肖な故で致方無いですけど、この小兒を放すのは、身を切られるよりも辛フございますから、どうか學齡に達するまで、私の手許で育てさせて頂くやうに、貴父から姑へお頼みなすつて下さる事は出来ないでせうか……母様は現在の孫であるのに、私がお氣に召さないためですか、この兒までお憎しみなさるので、祖母様は怖い〜と申してお傍へも碌々寄り着かない状態ですから、私が居なくなりましたら、甚麼に慘酷な目に遭はされるかと思ひますと、それが如何にも可愛相で何と考へましても、手放して歸る事が出来ないんでございます」

「言ひ了つて頬に傳ふ涙を拭ふた。」

「それは一應道理な事ぢやが、それではお前は再び結婚は爲ない量見か」

「不思議相に顔を見た。」

「はい、もう甚麼事がございまして、結婚は致しません、懲々致してございま

六十五

二十四と言ふ女盛の身を持ちながら、前途遼遠なる一生を、獨身で送る旨を答へた照江の辭に、仙波大佐も太く心を動されて、能々姑の虐待に懲た事を覺つた。

「再び結婚爲ないと言ふならば、それは小兒を預つて育て、遣るもよからうが、しかし先方で何と言ふやら、私の老へでは然う言ふ精神の老人では、到底も承知爲ないであらうと思ふが、其程に可愛くて堪らないものならば、話は爲て見る事に爲やう」

「どうぞ、お願ひ致します」

「すると、國男も暑中休暇を幸に一先一緒に國へ連れて歸つて這度上京爲た時は寄宿舎へ入らせる事に頼むで歸らうよ」

「それに就て、私御相談があるんですが、私今更離縁されて國へ歸るのは、世間へ面目無くて歸られないんですから、暫く東京に居たいと思ひますから、國男と一緒に家を持たせて頂く事は能ないでせうか、然うすれば、國男を監督爲ながら、私も今

少し勉強して女學校の教授に成れる資格が得たいと思ふのですが……若それをお許し下さらないに爲ましても、私國へ歸る精神はありませんから、どうか獨身で暮して行けるだけの道が立つまで、東京に置いて下さるやうに願ひ申します」

決心の色を浮べて訴へた、大佐は沈思黙考して居つたが、鼻下の髯を捻りながら、

「歸るのが可厭だと言ふならば、お前の荷物を國へ送るのも厄介な話だし國男の荷物も有る事だから、何處か適當な家を借りて、前途は左に右當分東京に居るもよからうが、しかし何彼の談話は園村の方が落着爲た上で、寛り相談するとして、お前は先へ歸つて往くがよい」

「はい……では失禮して歸つて参ります」

太く叱責される事とのみ覺悟して來たのが、豫期したほどの小言も受けなかつたのみならず、寧ろ己の希望を快く容れて下れたので、離縁されるのは、堪へられぬまで悲しいが、離縁後の心配が少なくなつたゆゑに、大佐の顔を見た時の如き悲哀の念は去つて居つた。

「歸つたらば、私が後刻往くと傳へて置け」
大佐が言付けた。

「はい」

「それでは、今傳を命じさせるから、暫時待つて居れ」

「はい」

大佐は呼鈴を鳴らして館婢を呼んで、直に傳の用意を命じた、館婢は畏つて下に往つた。

「雪子は何うした、大層黙つて居るが、睡つて了つたのぢやないか」
大佐が聞いた。

「はい、乳を弄りながら寝て了ひましてございます」

「何にも知らないで居るであらうが、若も此限別れて了ふ事にでもなれば、不便なものぢや喃」

「は……い、それが何より可愛相でございませう」

又忽ち聲が曇る。かゝる所へ館婢が上つて来て、傳の支度の整ふた旨を告げた。

「それでは失禮致します」

照江は雪子を抱いたまゝ、漱に挨拶して室を出た。而して館婢と共に階下へ降りて、直に傳に乗つて園村家へ歸るのであつた、午に近い太陽は、焼くが如き暑い光線を浴せて、傳夫の首筋には玉のやうな汗が、湧くが如く流れ出るのである。

六十六

照江が父なる大佐を、其旅館に訪ふべく家を出ると、物の五分間と経たぬ中に、お濱は自ら外に出て、半町ばかり隔つた傳の帳場へ往つた。而して一通の書面を出して、田町の小林へ持たせ遣して歸つて来た。すると三十分を経た頃、勝子が傳に乗つて来た。待受て居たお濱は直に己の室へ呼入れて、四方を憚る忍び聲で、

「手紙を見てくれたであらうけれど、照江の親父が上京爲てね、先刻照江を呼に寄來したから、現時まだ照江は宿へ往つて歸つて來ないのだが、いづれ程なく親父がやつて來るであらうと思つて、それで呼に遣つたんだよ」

勝子は、丸鬚の鬚の邊に滲み出た汗を、香水の香の高い白麻のハンケチに拭ひつゝ、
 「母様のお手紙ツたら、眞箇讀悪いわ、假名ばかりで書てある上に、時々落字がある
 んですもの……照江のおしか来たから直に來てくれと書てありますから、屹度叔
 父が來たので、來て下れいと仰やるんだと、想像は爲ましたけれど、それでは親父
 のやの字を脱して、加之にじの字へ濁を打たないで寄來しなすつたんですね全で判
 じ物見たいだわ」

と微笑した。お濱は眞箇無教育で、僅に假名のみを知つて居るのであるが、其假名さ
 へも、満足には綴れないから、時々滑稽な書面など認めるのである。

「氣がせかくして居ましたから、それでは字を書落したんですよ」
 同じやうに微笑した。

「では、照江のお父様が來たんですね」

「は、親父様が上京したんですよ……だから私一人では覺束無いと思ふて、それでお
 前を呼に遣つたんですよ」

「お父様が上京したのならば、少しは難題を言ひ出すかも知れませんかよ」

「私もそれを心配爲てるんだが、どうかまあお前は口も達者だし、理窟を言ふ事も上
 手だから、眞逆の節には宜しく頼みますよ」

「何でも彼でも離縁さへして丁へば宜いんですから、何を言つたつて取合さへ爲なき
 や可いんですよ」

「然うだとも、然うだとも、それが何よりの事だよ」

「宜ござんすよ、いくら理窟を言つたつて離縁すると言渡したものを、今更それでは
 と此まま置れる理のものぢやありませんからね、何でも彼でも家風に合はないと言
 つて歸して了うんですよ」

かかる相談を續けて居る半へ、照江が歸つて來た。それと知つたお濱母子は、ひたと
 談話を止めて了つた。照江は雪子が俵の上で目を覺したので、歸ると國男に預けて置
 て、直にお濱の室へ往つた。見れば勝子はお召縮緬の單衣に紹の帯を締めて、頻に團
 扇を動かして居た。まづお濱に對つて、

「唯今歸りましてございます」
挨拶した後、更に勝子に對して、

「お暑いのに能く入來ッしやましてございますね」と挨拶した。

「は、餘り御無沙汰したから、御機嫌伺に來ましたのよ」笑ひつつ言つた
「私共でも、失禮ばかり致して居りますがどうぞ御勘辨なすつて下さいませ」

六十七

お濱は照江の言出すのが待侘しかつたと見えて、

「お父様は何時頃入來ッしやる様なお話したつたかね」

問ひかけた。

「後刻伺ふから、其事を申上げるやうに言付りましてございます」

「あ、然うかね、それでは程なく入來しやるんだね」

「はい、程なく伺ふと存じます」

「雪子は何うしました」

「雪子は唯今國男と遊んでをりますが、何か御用でございませうか」

「いや、遊んでゐるのなら、それで宜いんですよ」

「では失禮致します……お姉様御寛とお遊び下さいまし」

例に變らぬ優しい挨拶して立去つた。すると勝子はお濱に對ひ、

「母様、仙波さんが來るのならば、御茶菓子位は出さなきやならないでせうか、お菓子

子在りまして？」

注意した。

「私も然う思ふたから、先刻煉羊羹を買つて來て置ましたが、羊羹で宜かありませんか」

「え、く、煉羊羹があれば澤山ですよ……それでは寸斷て何時でも出せるやうに菓子器へ盛つて置ませうか」

「それももう私が先刻ちやんと、切て盛つて置ましたよ」

「まあ、大層お手廻が宜いんですね。それでは何時來られたつて、少しも差支へないんですね」

微笑しつゝ言つた。

「どうせ來るんならば、早く來て貰つて片を附けた方が安心だからね」
密々語らひつゝある時、照江が來て、

「父が伺ひましてございますから、一寸お知らせ申します」
告げた。

「おや、然うですか……それではあの八疊へお通し申してね、直にお目に懸るからと左様傳へて置いて下さい」

お濱が言つた。

「はい」

照江が室を出やうとした時、

「照江さん、些と待つて下さい」

「何か御用でございませうか」

「は、これをお父様へ差上げて、お茶を出して下さい」

いひつゝ、菓子器へ盛つた羊羹を出して渡した。

「左様でございませうか、斯ういふ御心配には及ばないんでございますに……」

辭退しつゝ受取つて去つた。お濱は俄に衣服を更めて、やがて、勝子と共に客室へ往くのであつた。

仙波大佐は、袵の上に紋附の絹の羽織を着て、薄茶色の單袴を穿いて、手に扇子を持つて客室に控へてゐた。お濱母子は室の入口に坐つて、お濱が先づ初對面の挨拶をした。大佐も叮嚀に禮を述べた。續いて勝子が久濶の禮を述べると、大佐は又勝子にも慇懃に禮を返した。双方の挨拶が了ると、大佐は嚴格な態度で、

「扨今日伺ひましたは、餘の儀ではありませんが、照江が何か失態をされましたために離縁するといふ御宣告が在りましたさうで、電報をもつて私へ上京を促して來ましたから、非常に驚きまして、取敢へず早速上京した次第でありますが、苟にも此方

へ遣しましてから、本年度五ヶ年にも成りますし、殊には彼して小兒も在る身でありますから、能々の不都合がなければ、離縁など成されやう道理はないと思ひまして先刻娘を呼んで事情を問ねて見ましたが、娘の申す辭のみでは信ずる理に参りかねますから一應御離縁なすつた事情が承はりたいと思ひまして、それがために参上致しました、どうか詳しくお話が願ひたうあります」

言つて炯乎たる眼でお濱の顔を眺めた。

六十八

お濱は不安の眼色で勝子の顔を眺めながら些と單衣の襟を繕ふて、御遠方の所を御苦勞掛けましてございますが、離縁爲ました事情と言ひますのは貴方へ對しては、少し申上げかねる事柄ですけれど、しかし故々お入來下さつたのに、お話爲ない理には参りかねますから、隠さず申上げる事に致しますが、事情と申しますのは、ツイまだ四日ばかり以前の事です。私は此處に居ります娘の宅へ是非参らなければならぬ用向がありました、朝飯を頂くと間もなく参りまして、彼

是日暮近い頃歸つて参りましたが、いつも歸つて來れば、親切に出迎へて來れる照江さんの姿も見えなければ、國男さんの顔も見えませんが、可怪しい事だと思ひながら、玄關口を見ますと、見馴れない男下駄が脱いでございますから、其まゝ座敷へ上りまして、誰方か來客でもあるのか知らず、客室を覗いて見ても、人の影が見えませんが、不審に思つて照江さんの室を覗いて、今歸つて來ましたと、辭を掛けますと、照江さん一人とのみ思ふて居ると、思ひも寄らない若い男の方が居て、膝と膝とが突合ふまで傍に寄つて、照江さんの手から、確か十圓紙幣だと思ひますが、其男の人に渡して居る折柄だったので。私が俄かに聲を掛けたものですから、照江さんは勿論の事、男の人目も無さうに、黙つて俯向いて了ひましたから、私は呆れ返つて了ひまして、其まゝ自分の室へ入つて、困つた事が出來たものだ、獨り心配して居りますと、やがて照江さんが其男を歸して私の室へ挨拶に來ましたから、件から留守居を引受けて居るものですから、打棄て、置けませんので、何う言ふ關係の男か知らず、其關係から男の素性を問ねて見ますと、容易に返辭を

爲なかつたのですが、私が再三厳しく問ひますと、八郎とか言ふ叔父様だと、恁ふ言ふ答へを爲たのです。打見たところ漸と三十四五にしか見えない男が、豈夫叔父様であらう筈は無いと思ひましたけれど、しかし私は甚麽叔父様が幾人在る事か、詳しい事を存じないものですから、照江さんが言ふ通り、叔父様と假に定めて、這度はお金を渡して居た事を聞いて見ますと、何と問ねても俯向いたまふ、其理由を言はないんです。それがために、私も種々心配爲まして、何う取計つたらば宜いか知らと、暫時考へて見ましたけれど、設令其男が眞實の叔父に爲ましたところが、自分の室へ通すと言ふ筋のもので無いと思ひますし、況して言譯のならない怪しいお金なぞ渡して居る所から見しても、何うも叔父様と思へない點がございますから、然う言う不都合が在つては、私が伴へ對して留守居を引受けた役目が濟まないのみならず、園村家には然う言ふ氣隨な事をする嫁は、家風に適ひませんから、氣の毒ではありましたが、歸つて貰ふ事に致したのですから、どうか惡からず御承知が願ひたうございます」

と、答へた、仙波大佐は嚴格な態度で、沈と耳を傾けて聞いて居たが、徐に口を開いて、

「夫では、離縁すると仰やる理由はそれだけの事で、他には何にも無いのですね」
念を推して問ねた。

六十九

「はい、それがために歸つて貰ふ事に爲たのでございます」
お濱が判然と答へた。

「いや、それで委細了解爲ました。娘から聞きましたのと、さほど相違もありませんから、確に然う言ふ事實にあつた事と考へます。が、單に其だけの不都合で離縁すると仰やるんならば、あつして傷氣盛の小兒も在る事でございますから、此後の事は私から篤と不調法の無いやうに申し聞かせますから、どうか此度の所は、私に免じて御勘辨が願ひたいと思ふのです。恁う申すと娘の不調法を顧みない、勝手な御願ひのやうに思はれるでありませんか、這度の不都合に就きましては、私からもお疑の精

れるやうに、總ての事情を申し上げたいと思ひます

と、言ひますのは、貴女が唯今若い男が来て居たと仰やつた、其男と言ひますのは、何を隠しませう、眞箇私の實弟に當ります、廣澤八郎と言ふ者に相違無いのであります。貴女方は御存じないでありませうが、仙波には男兄弟が八人と、女姉妹が三人、都合十一人兄弟でありまして、總領を太郎、二男を次郎、三男を三郎と言ふやうに、生れるに従つて數字を頭字にして下は皆な郎の字を名に命けましたから、私は五男でありますから五郎一番の末弟は八男でありますから八郎と命けましたから、私の方の親戚に當る廣澤家へ養子に遣しましたのです。それが即ち這回お疑の原因となつた、廣澤八郎なんであります。元來彼男は青年の頃から身持の宜くない男でありまして、親兄弟の名譽を汚すやうな虞がありましたから、度々意見を加へました。が何う爲ても聞入れませんので、止を得ず一同相談の上で絶縁して丁ひましたのです。それがために、一家親類誰あつて相手に成つて遣るものがありませんから、東京に出て不如意な生活を爲て居たところへ、照江が此家へ參つた事を聞出しました

所から、これまでも一兩度尋ねて来て、金の無心を言つた事があるさうですが、這度も彌張金子が三十圓ばかり借たいと言つて書面を送りましたさうですか、照江には私から決して交際つてはならないと堅く戒めて置きましたから、金子の調達は少も出来ないと返書を出したさうですが、それにも拘らず、強て訪ねて来て、少しなりと貸せよと言つて、何う断つても歸つて往かないために、止むを得ず十圓だけ出して歸さんと爲てる所へ、貴女がお歸りになつて、御覽なすつたと言ふ次第で、三十四五には見えますけれど、あれで本年四十一に成るんであります。然う言ふ理で、貴女の御想像なすつたやうな、隠し男と言ふやうな、那樣怪しい者ぢや必ず無いのであります。唯貴女から何がために金を渡したかとお問ねになつた時、恁々とお答へ爲かねたのは、金子を借に来るやうな叔父のある事を、お知らせ申したく無いためでありましたので、外に深い理由は何にもなかつたのであります。どうか疑念をお晴し下さつて、此度の不調法は平に御勘辨下さいますやう私から折入つてお願ひ申しあげます。

一伍一什の顛末を物語つて謝罪した。其辭を聞いたお濱は、何と挨拶して宜いか、挨拶に當惑爲たので、真逆の時の方と恃む勝子の顔を眺むるのであつた。

七十

すると勝子が口を開いて、

「お辭は能く解りましてございますが、叔父様であつたと仰やれば、叔父様でございませうけれど、私共の家風は、設令叔父様であらうと、女が自分の室へ、他から来た男の方を入れるなぞといふ事は家族の者が宅に居りましても、堅く禁じてありまして、況て誰も宅に居ない時などは、座敷へ通さない事に爲て居りますほどで、至つて嚴しい家風になつて居るのでございます。其家風も憚らないで、男の方を室に引入れて、密々話を爲たり、お金を渡したりするやうな人は、どうも私共の家風に合はないんですから、折角のお辭ではございますが、これまでの御縁とお諦め下さつて、どうか御引取を願ひたうございます」

家風を眞向に振翳して、強ひて離縁を主張するのであつた。仙波大佐は到底覆がの盆

に返す事のならないは、豫め察して居たから、事情を述べても承諾せぬ曉は潔く引取る決心では来たもの、可愛氣盛の小兒まで在る中を、離縁すべき理由もなくして離縁の不幸を演ずるは、第一小兒が憫然である、娘も氣の毒である。何にも知らないで、異郷の空で公務に努力して居る園村は、尙更氣の毒である。と、二方三方の不幸を考慮して、元の如く治るものならば治めたいと、八郎の身の上に就て、恥辱も外聞も厭はず辯解したのであるが、それをも承容れないで、無道にも些々たる家風を楯に、飽まで離縁を主張するから、心の中では姑小姑の無情を憤りながら、尙も辭を和けて、

「御家風に合はないために、何うあつても離縁するから引取と仰やるならば、これは致方がありませんから、娘は速に連歸りますが、それに就て一つのお願があるんですが、それは外ではありません、雪子の事です、娘が申しますには、自分は離縁すると仰やれば、止を得ないから歸りますけれど、雪子と別れるのが如何にも辛いから、どうぞ學齡に達するまで自分の許で育てさせて貰つて下れと、懇々私へ頼み

ますから、此儀が一つ御承知が願ひたいと思ひますが、如何なものでありませうかし

と、頼むだ。お濱は又も勝子と顔見合せて眼色で何事か知らせた。すると勝子が又母を差置いて、口を開いた。

「折角のお辭ですが、乳呑盛とでも申すんでございますと、それは又小兒のためといふ事もあるのですが、もうやがて五歳に成りますから、殊に智恵の進むで居る方でございますから、母や私共の手で、いくらでも養育が能ますから照江さんの手を煩はすまでも無いと思ひます。のみならず、預ける事になると、私共の一存にも斗ひかねますで、閑へ一應相談爲なきやなりませんから、どうか此事も悪からずお辭り申したうございます。」

又拒絶して了つた。大佐は此事も初から拒絶される事と覺悟して居たので、止を得ぬ事と強て頼む心は無かつたが、勝子が辭の中に、如何にも他を莫迦にした辭があつたから、小癢に障つたと見えて、

「預ける事が能ないと仰れば、これも致方はありませんが、しかし、閑君へ一應相談した上でなくちや、一存には斗はれないと仰やるが、それでは改めてお問ね爲ますが、小兒を預ける預けない位な事ですら、相談なさらなくては、決定が就かないほどであれば、人の一生に關する離縁問題に就いては、無論閑君へ御相談の上で、御決定なすつたのでありませうね。其邊の事情が承りたいもんです」

七十一

急所を射込む大佐の辭は、お濱母子の胸を突貫いた。勝子は確と挨拶に困つて、お濱の顔を眺めた。するとお濱が、

「私共の悴は親の命令を背くやうな、那樣不孝者ぢやございませんから、突然起つた事でもあります、悴には後から電報や書面を遣りましたけれど、離縁の相談は致しませんでございませう」

少に答へた。

「は、あ、それでは重大な離縁問題は、親の御威光で勝手に御決定なすつても、小兒を預ける事は、勝手に斗られないと仰やるんですね……いや御精神のほど能く解りました、此上は最早何にも申しません、照江は今日限り引取ります。が、何分遠方の事でありますから、荷物は一兩日後れて引取るかも知れませんが、此義は前以てお断り爲て置きます」

「それから伴も永々御厄介に預かりましたが、彼も今日一緒に連れ歸りますから、左様御承知を願ひます」

「其邊のところは、御随意になすつて下さいまし」
お濱が挨拶した。そこで大佐は、

「では、失禮ですが、一寸兩人をお呼び下さい」

と頼むだ。すると勝子が立つて室を出たが、やがて照江と國男を呼んで来た。雪子は照江に手を引かれて和々して居た。姉弟が坐に着くと、大佐は沈むだ調子で照江に對ひ「お前の離縁に就いては、私は八郎の事を能く知つて居るから、事情を述べて御疑念

の解けるやうに、種々願つて遣つたけれど、家風に合はないから、何うあつても此まゝに置く事はならないと仰やるから、止を得ず今日限り連れて歸る事に成りましたから、閑君が赴任以來は、お姑様に一方ならない御厄介に預かつたさうだから、能くお禮を言つてお暇の挨拶するが宜からう」

と、最後の宣告を興へた。照江は到底圓満に治らないと、覺悟は爲て居たものゝ愈々園村家を去る事となつたから、辭よりも先づ涙が雨の如く落つるのであつた。

「は……い……それでは何うあつてもお疑念が晴なくて、離縁すると仰やるんでございませすか……残念でございませす……」

袖に顔を蔽ふて泣くのであつた、大佐も照江の心中を察して、暗涙を泛べて居る。國男の目からもはらりと落涙した。

「泣、泣くな、何事も運命ぢや、これまでの縁ぢやつたと諦めればそれまでだ、早、これまでのお禮を言つて、荷物なぞの仕末を爲るが宜い、お前も軍人の娘ぢやないか……見苦しい振舞を爲るな……」

鼓舞するやうに諭したが、堪へかねて密と涙を拭いた。照江も大佐の辭に觸されて、漸く姿勢を正してお濱に向ひ、

「それでは母様にもお姉様にも、今日限りお別れ致しますでございます。永い間一方ならずお愛しみ下さいまして、有、有難ふ存じます。どうぞお軀を御大切に、幾久しくお榮えなさいまし」と、淑に挨拶した。

七十二

お濱は有繫に挨拶に窮つて、極悪さうな顔をして居たが、黙つても居られないので、「永く居て下れて、小兒まであるのを、歸して了ふのは、私も氣の毒に思ふけれど、どう言ふ成行になつたんだから、これまでの縁だと諦めて下さいね」と挨拶した。勝子も挨拶の辭に窮つて、

「貴女も、軀を大切にして下さいね」と大佐は再び照江に對ひ、

「雪子の事も、お前の頼ちやつたから、お願ひ爲て遣つたけれども、もう四歳にもなつたので、此方で十分育てる事が能ると仰やつて、これも御承知がないから、いくら可愛くとも今日限り別れなさいやならないから、彼方へ連れて往つて、別を惜むが宜からう」

「それでは、雪子とも今日限り別れなさいやならないんですか……若しお母様、お姉様……お情でございます、學齡に成るまでお許し下さる事が能ないなれば、せめて今年一ぱいでも宜しうございますから、どうかお貸しなすつて下さいまし、お願ひでございます」

涙ながらに頼むのであつたけれどもお濱や勝子は、小兒のあるがために、照江が復縁するやうな事が無いとも限らぬので、それを懸念する餘り絶対に小兒を預ける事を厭ふのである。

「唯今もお父様からお話がありましたけれども、何時まで経つても小兒の可愛いのは同じ事で、預けたところで、這度引取る時は彌張辛い思をして別れなさいやならない

ので、何時は同じ思を爲なきやならないんだから、それよりか寧ろ一思に別れて歸つて下さい、いつまでも關係が残つて居ては、お互に困りますからね」

勝子が拒絶した。照江も到底希望の達せられぬと覺悟したので

「これほどお願い申しても、お承容れ下さらない上は、最早致方がございませぬから、諦めますでございしますが、どうぞまだ頭是がございませぬから、何分宜しくお願い申します」

言ひ了つてハンケチで顔を押へた。

「小兒の事は心配爲なくても、私のためには孫だし、勝子には姪だもの、大切に育てますから安心爲て居て下さい」

お濱が慰め顔に言つた。雪子は小兒心にも妙な顔して一同の顔を眺め競べて居たが、照江が餘り泣き悲むを見て、

「母様……」

泣聲を以て膝に絶つた

「お……」

と照江は覺えず膝に抱上げたが悲哀に堪へかねて、

「御免下さいまし……」

と、雪子を抱いたまゝ室を出た。すると大佐は俯向いたまゝ膝の上に落涙して居る國男に向つて

「國男、お前も今日限り此方をお暇するんだから皆様に挨拶して、姉様の手傳して荷物始末を爲て遣れ」

「はい」と答へて拳で涙を拂つた後

「どうも、永く御厄介かけて相濟ませませんでした。それでは僕も今日限お暇致しますから御機嫌能くお暮しなさいませ、失禮ですが兄様へも宜しくお傳へ下さい」

「貴方も精を出して御勉強なさいよ、而して此方に居らつしやるんなら、時々遊に入

來つしやいな」

勝子が言つた

「はい、では失禮致して荷物の手傳致します」
一禮した後室を出た。

七十三

雪子を抱いたまゝ室を去つた照江は、溢れ出る涙を拭ひもせず、其まゝ己が室へ入つた。而して哀しさうな顔をして居る雪子の顔を熟と噴めて、

「雪ちゃんや、お前は何にも解るまいけれど……母様は今日限り遠い所へ飯つて了ふんですよ……も、もう母様の顔が見たくても、顔を見る事も能なければ、お乳を呑む事も能ないんですよ……えゝッ、母様が居なくなつた後は、お祖母様に抱れて寝るんですが、必ず我任意を言つては不可ませんよ、お祖母様が何を仰やつても、はいゝと能く仰やる事を聞くのですよ……無理な事でも言はうものなら、打たれたり毆かれたり酷い目に逢はされますよ……可いかへ、必ずお悪戯を爲さんなよ……若又異つた母様を貰つたればね、母様々と慕懐かなければ不可ませんよ……必ら

ず憎れ口を利いてはなりませんよ、えゝッ……解りましたか……た、たとえ母様が飯つて往つても、必ず母様を怨んで下れちや困りますよ……母様は雪ちゃんか、可愛くて可愛くてならないんだけれど、お祖母様が置ないと仰やるので、止を得ず飯つて往くんだからね……」

涙を瀧の如く流しつゝ、肺腑より絞るが如き聲を出して言ひ聞かせるのであつた。雪子は解るか解らないかは知れぬが、泣顔しながらも、母の顔を眺めて、靜に聞いて居る。かゝるところへ國男が入つて来て、

「姉様、雪子が可愛相ですね、姉様が居なすつてさへ、小母様が手酷く叱り飛ばされるのに、居なくなつて見なさい、甚麽酷い目に遭はされるか知れたもんぢやありませんよ、僕は、そ、それを思ふと實に可愛くて堪らないんです」

ほろ／＼と涙を零しつゝ、傍に坐つた。

「私もそれが傷しくて堪らないから、今言ふ事を能く聞くやうに言聞せて居たんですが、何を云ふにもね……まだ乳を呑むでるんだもの……いくら言ひ聞かせても、

迎も解る理はありませす、定めて惨酷な目に遭はされるであらうと、そればかりが心配で、心配で……………」

と、潜々と泣く、兩人がしくくと聲を噎つて泣くので、雪子も遂に泣出した。

「お前は泣かなくとも宜いんですよ……………さあさあちやんとお止めなさい、お祖母様に叱られますよ」

透し宥めて、

「お父様が待つて居らッしやるんだから、早く荷物の始末を爲て了ひませうね」

「は、僕の柳行李を一つ空けて置ましたから、細くした物を彼中へ入て了はうぢやありませんか」

「然うね、空いて居たら貸して下さい、大抵な物は此間から長持や箆筒の中へ入れて了ひましたけれども、まだ細々した物が餘ほど集めて在りますからね」

「それぢや、行李を持つて来て、容れて繋けて了ひませう」

「どうか然うして下さいよ」

國男は行李と麻繩を持つて来て、細々とした品を残りなく容れて引繋げて了つた。

七十四

國男はやがて再び大佐の待受けて居る室へ往つて、

「お父様、荷物は何時でも積めるやうに、悉皆引繋げて荷造爲ました」

と告げた

「然うか、それではお前は其邊へ往つて、俵を三臺頼むで来い」

「荷物を載せるんですか」

「いや、お前等が乗るのだ」

「然うですか、それならば二臺で宜いちやありませんか、お父様の俵は待つて居ますから……………」

「でも、忽ち必要の手荷物が有るぢやらうで、それを載せる俵が要るだらう……………」

「靴が三箇ばかりですもの、別に頼む必要は無いですよ」

「それでは二臺頼むで来るが宜からう……………」

「はい」

と國男は出て往つた。お濱や勝子は去るにも去られず、さればと往つて世間話を爲へき場合でもないので、やゝ俯向加減になつて、黙つて控へて居る。大佐は氣の毒と思つたか

「どうか、私にお管ひなく、御勝手に御用をなさつて下さい、私は俵の來るまで、此處でお邪魔させて貰ひますで……」

挨拶した。するとお濱が

「いつまでなりと。寛りお休みなすつて下さいまし、私共も別にこれと申す用向は無いですから、必ず御心配下さいませな」

答へた。するとやがて國男が飯つて來て

「俵を連れて來ましてございます」

告げた

「然うか、それは御苦勞ぢやつた、それでは姉様に然う言つて、一先私の宿元まで」

緒に引取る事に爲やう、然う言ひ聞かせて下さい」

「はい」

國男は又照江の室へ往つて、父の命令を傳へた。照江はまだ雪子の頬に己が頬を摺附けなぞして、何か言聞かせて居たが、國男の辭に勵まされて、放れ難ない雪子を膝から下して立上つた。かゝるところへ、大佐が飯るべく客室から出て來たので、照江も國男も、送つて出たお濱勝子の兩人へ、告別の辭を述べて玄關へ出た、雪子は照江の後を追ふて、泣きながら玄關へ出たが、其處でお濱と勝子に遮られて、照江に近く事が能ないために

「母様、母様……雪子も順く爲まつから、連つて頂戴よ……」

泣き叫びながら、後を慕ふのである、照江は大佐と國男に乗車を勧めて、泣き叫びつゝある雪子に向ひ

「これく雪ちゃん、何ふ言ふものです、那樣に泣くものぢやありませんよ、母様は雪ちゃんのお菓子を買に行くんですから、直に飯つて來ますよ、えゝ願しくしてお

祖母様と待つてゐるんですよ。ね」

優しく宥めるは宥めたものゝ、これが母子の生別かと思へば、胸の張裂けはせずやと思はるゝばかり哀を覚えて、血涙は雨の如く溢れ出るのである。

「順く爲まつから連つて頂戴よ、ね……母様……」

小兒ながらも、照江の辭を聞分けて、遠い所へ往つて了うと知つたのであらう、歎息げつゝ哀の聲で訴へて、取絶らうとする。お濱と勝子は抱き竦めて

「さあ、皆様が待つて居らつしやるから、管はず乗つて下さい」

泣叫ぶ雪子を隔てつゝ促した。照江は盡きぬ餘波の熱涙を、少に袖に隠しつゝ、氣を勵まして俥に乗つた。雪子は泣入つて暫時聲も得立ず、後を慕ふのであつたが、俥は早くも園村家を去つた。

七十五

お濱と勝子とは、思はず顔を見合して、淋しい笑を含みつゝ、

「吁々、苦しや、苦しや、壽命が三年ばかり縮つたやうな氣が爲ますよ」

お濱が胸を撫でながら言ふ、勝子は歎息して居る雪子を覗しつゝ、

「本當に御心配かけて相済みませんでしたわね、どうぞ堪忍して下さいましよ」
禮を述べて、共に雪子を連れてお濱の室へ入つた。

「それではお前は飯つて往つて、お辰を直に寄來して下さいませんか、私が雪子のお守をすれば、他の事は何にも出來かねますからね」

「は、お辰は直に寄來しますが、飯りがけに慶庵へ寄つて、小供のお守を爲せたりお使歩を爲せるやうな、十五六の小娘を一人頼むで置ますわ、二軒が一緒に居る事になれば、女中が一人では逆も手廻りかねますからね」

「どうか、然うして下さい、私もなか／＼小兒の守ばかりは爲て居られませんでな
すると勝子は思ひ出したやうに、

「忘れて居りましたが、仙波さんに然う言つて、照江の戸籍を早く返して了はなさない
りませんね」

「然う／＼それが肝心ですよ、どうか小林に相談してね、仙波さんが東京に居る中に

早く手續を済して下さい」

「では、役所へ電話を架けて、成だけ早く歸つて来るやうに言つて遣りますわ。豈夫今日や明日に國へ歸りは爲ないでせうけども戸籍を送つて了はなきや片が着かないんですからね」

「それは小林に頼むとして、家は何時引越しますね、成だけ早く爲て貰はなきや、不氣味で夜なぞ睡られないからね」

「照江等が歸つた以上は、何時だつて管ひませんから、小林と相談爲まして明日にも引越して了う事に致しますわ」

「どうか、然う言ふ都合に成る事ならば、一日も早いが宜いわね」

照江を離縁した後はお濱と雪子のみとなるので、園村家は小林家から見ると、家が廣いために、小林夫婦が同居する事に相談が決定して居たのである。雪子は叱られてはと、泣き止めて哀さうな顔して傍に坐つて居つたが、思ひ出したやうに、又しくしくと泣き出した。するとお濱が怖い顔して

「そんな何時までも泣くもんぢやありません……泣くと乞食に遣つて了ひますよ」

睨み附けた。雪子は泣きたさを堪へて、小さい掌で涙を拭ふのである。

「さア、羊羹を上げるから泣くぢやありませんよ」

勝子が羊羹を挟むで與へたが

「……………羊羹要らないの……………叔母様、母様の所へ連れてツて頂戴な……………」

又泣き出した

「母様は遠い所へ往つて了つたんだから、もう母様の事言ふぢやありませんよ、其代り叔母様が遊に連れて往つて上げるからちやんと泣止んでお行儀宜くなさい」

「それちやお前、この兒を連れて飯つてお辰(下女の名)を早く寄來して下さいな」

「では、然う致しませすわ」

勝子はやがて進まぬ雪子を透し宥めて我家を指して飯つて往つた。

七十六

晝さの名残を園村家に留めて、涙ながらに俥に乗つた照江等父子三人は、やがて旅館

對翠館へ着いた。旅館では大佐が出る時に話し置いたので、大佐が滞在して居る次の室を姉弟の室と定めて、直に館婢をして案内せしめた後、番頭をして手荷物を運ばしめた。

照江は室へ入ると、又しくしくと泣き悲しむのであつた。大佐は慰め顔に

「どうも話を爲て見るのに、八郎の事を離縁の理由にはして居るけれどもそれは本の口實に過ぎないので、能くは解からないが、何か他に事情があつて離縁する様に思はれるんだ……何かお前に然う言ふ様子は見えなかつたか」

問ひ試みた。照江は涙を拂ひつゝ、

「私も然う思ふのでございますが、外にこれと言ふ不都合を爲た覺はないんですから、屹度私が氣に入らないので、離縁爲やうと思ふて居なすつたところへ、叔父様の事があつたので、これ幸と離縁されたのぢやないかと思はれますわ」

「私も然う思ふのぢや、何故かなれば、関が出發の後に、食物の儉約を爲たり、お前の手からお金を奪つたり、下女を飯したりしたのは、皆なお前を苦しめたり氣を悪

くさせて、自分から暇を取らして飯す意であつたに相違無いと思ふのだ、それをお前が那樣に軀の瘦せ衰へるまで辛抱して、飯つて往く様子が見えないので何かしら離縁の理由になる事は無いが知らず、其事にのみ注意して居る所へ、八郎の來てるのを見附たので、奇貨措くべからずとして、それを理由に離縁する事に爲たのだが、原因はどうも外に有りさうに思はれるのだ……しかし小兒は可愛相であるが、既に虐待を受けた上に、汚名を被せて離縁された上は、設令関から何と言つて來やうと、姑小姑へ對する意氣地としても、斷じて復縁は爲せないから、お前も再び園村家の人に成らうなぞと思はないが宜い。あゝ言ふ没義道の人間と言ふものがあるものぢやない」

決心を促がした

「はい、雪子は可愛相ですけれど、再び飯らうなぞとは思ひませんです」
涙を泛べて答へた。國男は傍に坐つて兩人の談話を聞きながら、暗涙を泛べて居つたが、それを拭ふために、懷の中からハンケチを取出すと、何か紙片が一緒に出たので、

何氣なく其紙片を取上げて不思議さうに眺めて居たが、忽ち驚き顔に、

「お父様、解りました、姉様を離縁したのは必ず深い原因があるに相違無いです、僕先刻姉様の荷物を繋げやうと、僕の室から行李や麻繩を持つて、姉様の室へ行がけに、紙片を踏むたので、僕は鼻紙が落ちたんだと思つて、其まゝ拾つて懐に入れて置きましたが、唯今ハンケチを出さうと思つたら一緒に附いて出ましたから、何の氣もなく擴げて見ると、恚う言ふ事が書いてあります、失敬極まる奴ぢやありませんか」

憤慨しつゝ大佐へ出した。大佐も照江も如何なる事が記してあるかと、驚きながら眺めるのであつた。

七十七

國男の出した紙片は、普通の巻紙へ認めた一尺ばかりの書面で、左の如く認めてあつた。

照江事、いよく離縁と決定致し、一兩日中には歸國致すべく、これにてお約束の

端緒相開け候間御安心下されたく候、いづれ近々參上委細おものがたり申上ぐべく候へども、一寸御知らせ參らせ候
讀み了つた大佐は不審の眉を蹙めつゝ

「差出人も無ければ、宛名も書ては無いが姑か小姑が書たものに極つて居る。お前には筆蹟に見覺があるだらう」

と照江に渡した、照江は一目見るより

「これは小林の姉様の筆蹟でございます」

言ひつゝ、文句をすらくと讀み了つた

「驚きましたね、この文面で見ますと、私の離縁を誰かと約束でも爲てあつたやうに見えますが、何う言ふ理でせうね」

大佐の顔を見上げた

「何うも、何かしら他に事情が有るらしく思ふたが、果せるかな、恚う言ふ秘密が伏在して居るので、八郎の事を托けて離縁したのだらう、肝心の宛名が無いので誰と

何う言ふ密約が結んであるかは知れないが、豈夫闖と相談の上ぢやないだらうね」
 「それはもう、闖が關係爲てるやうな事は決してございませぬから、若も秘密がある
 とすれば、姑、小姑、が誰かと約束爲てるに極つて居りますけれど、何がために私
 を離縁するんでございませうね」

沈と思案するのである、大佐も如何なる理由か想像に苦しむで

「何がためだか、餘り不思議な書面で想像も成かねるが、お前に怨でもあるものが姑
 や小姑を頼むで、離縁させたのかも知れないね」

「ですけれども他人の家へ嫁附ても居るのならばですけれど、現在園村の親や姉に
 頼む道理もありませぬ、設令又頼むだにしたところで、可愛い忬の家庭……それも
 小兒まである家庭を、親や姉として破る道理は無いと思ひますがね」

「それも然うだね……實に不可思議千萬な話だが、しかし、甚麽秘密があるにした所
 で今となつては六日の菖蒲だ……詮議して見たところが、何の役に立つものぢやな
 いから、何事も運命と諦める外はない」

すると今まで無言で居つた園男が

「しかし、暫時く經つて御覽なさい、いづれこの秘密は園村家か、小林家へ吃度顯れ
 て來るに極つて居ますよ……僕は何か爲にする所があつて、離縁したものに相違無
 いと思ひます」

「それは然うかも知れないが、しかし何う成らうと、園村家と關係を斷つた上は、決
 して願慮するには及ばない……それよりか、恚う事が落着した上は、取急いで決定
 爲なきやならないのは、お前達の善後策だが、何う言ふ事に極やうかね」

言つて大佐は兩人の答を待つのであつた。照江は躊躇する様子もなく

「私は何うあつても國へ歸る心はありませんから、先刻もお願ひ爲ましたやうに、東
 京で小い家でも借りて、國男の監督爲ながら、軀の保養を爲たり、傍ら今少し勉強
 して、女學校の教授にでもなつて、一生を獨身で送りたいと思ひますから、誠に我
 任意なお願ではございますけれど、茲三ヶ年ばかり御厄介がお願ひ申したうござい
 ます」

希望を打明けて頼むだ。すると國男も其尾に附いて

「僕も然う言ふ都合になれば、大層都合が宜いですから、願へるなら然う言ふ事に爲て頂きたいです」

七十八

大佐は暫時黙考して居つたが

「何うしても國へ歸らないと言ふならば、それは東京へ居るも宜からうが、しかし月々何程宛あれば家が持つて行けるか知ら……私も現今は遊んで居るのだから澤山な金を送る理に行きかねるで喃」

相談的に言つた

「小さい家を借りて節儉に爲て行けば、四十圓もあれば何うにか遣つて行けやうと思ふのです」

「四十圓？何うして遣つて行けるものか、この物價の高い東京で……」

「それは下女を使つたり、贅澤をすれば足りないでせうけれど、私が臺所を遣つて行

けば、四十圓あれば遣つて行けやうと思ひます」
 「それでは下女も使はないで、自分が臺所を行らうと言ふのか」
 呆れたやうに言ふ

「はい、今日まで園村で何も彼も私が遣つて來ましたから、下女などは居なくつても宜しうございます」

「その纖弱い軀をして、下女を使はないで居た日には、益々健康を害して勉強どころぢやない。病氣を引起して取返しにならない事になつて了ふ、それでは左に右國男が中學を卒業するまで、東京で世話を爲ながら軀を保養する事に極て、一ヶ月五十圓宛送つて遣るから、お前等兩人では無用心でもあるから、下女だけは使つて其代り成たけ節儉にして遣つて見るが宜からう」

と言渡した。照江は今に始めぬ事ながら親の有難さを一層痛切に感ずるのであつた。

「何うも有難うございます、五十圓宛頂けば下女を使ひましても、何の不自由なく勉強して行けますから、冗費を省きまして、及ぶたけ節儉に暮しますでございませう」

「それでは、お前達の荷物も成たけ早く引取つた方が宜いで、これから直に家を探しに往つて来るが宜からう」

命令した

「はい、家は何の方面へ借たら宜いでございませうか。國男が學校へ通ふのに、成たけ近い所が宜からうと思ひますが……」

「それは其方が宜いだらう、それがために故々借やうと言ふのだからね」

「如何です姉様、園村と隔つて都合も好いと思ひますが、芝か麻布邊は……」

國男が意見を述べた

「然うね、中學へ近い場所と言へば、芝の方面が一番便利が宜いわね」

「芝の金比羅様の近所なら、電車に乗る必要も無し、大層都合も好いんですがね」

大佐は國男の辭を聞いて

「それぢや、芝か麻布邊で、成たけ學校へ近い場所と相應な家を借るが宜いちやらう」

「はい、それでは然う言ふ方針で、國男を連れて探して参りませう」

「一時も早く往つて来るが宜からう」

言ひつゝ、紙入を取出して、其中から拾圓紙幣を抜き出して

「好ましい家があつたらば、直に家賃や敷金を聞いた上で手附金を渡して、借りて了ふが宜い」

と、紙幣を渡した。照江は其を受取つて

「それでは、直に往つて歸ります」

國男と共に對翠館を出た

七十九

照江等姉弟は、戸々の軒燈が輝き初むる頃歸つて來た

「唯今歸りましてございます」

打揃ふて挨拶した。待設けて居た大佐は

「何うちやつた、好い家が見付つたか」

聞ひかけた

「はい、方々を捜しまして、漸と格好な家を見附けましてございます」

照江が答へた

「は、アそれは宜い都合ぢやつたね、場所は何の邊だね」

「場所は赤坂の靈南坂町でございます」

「それでは伊藤統監の官邸の在る近邊と見えるな」

「はい、統官邸に附て右に曲りました、靈南坂教會の在る少し手前でございますが至つて閑静な、勉強するには誠に相應しい家でございます」

「何う言ふ風の家ぢやな……あの邊の場所柄だから、安くつて貸さないであらうが……」

すると國男が手帖を出して

「念のために圖を引いて來ましたから、これを見て下さい」と大佐へ渡した。大佐は仔細に眺めて居つたが

「すると何ぢや喃、八疊と六疊と、四疊半と二疊二間で、都合五室あつて十二圓と言ふのぢやね」

「は、然うなんでございますよ。高くは無いでせう」

「永く東京に住居爲ないから、近來の比較は知らないが、何にしても五室あつて十二圓ならば決して高くは無いちやらう。庭も少しは在るやうだし、専用の水道も附て居るのだからね」

「大變安いと思ひまして段々聞いて見ましたらば、家主が頑固で、小兒の在る人には貸さないんださうです、それがために他の貸家に比較すると二割方安くしてあると、差配の爺さんが話して居たんですよ、ですから家は新しい方ではありませんけれども、それは、綺麗で、庭も比較的廣いんですよ」

照江が物語つた

「は、それは好都合ぢやつた喃、ごうぢや國男の學校までは、餘程距離が在るのかい」「然うですわ、餘り遠くはないんですが……國男さん、何丁位あらうわ」

と國男へ聞いた。

「なかに、僅か七八丁しかありませんから急いで往けば十二分間位で往けるんです、電車賃だけは要らない事になりました」

「それは近くて便利が宜い喃、して敷金は何程要るのだ」

「敷金は二ヶ月分預けて置のなさうです」

「手附金を渡して置たか」

「はい、手附金は要らないと言ひましたけれど、二圓渡して受取を取つて來ましてございませう」

「それでは、今晚は夕飯を食べたらば、早く寝むで、明日は早朝に車夫でも備ふて掃除を爲せて、道具を買整へて移つて了ふが宜からう」

「はい、然う言ふ事に致しませう」

かくて其翌日家具萬端を買整へた上、下女までも備ひ入れて、靈南坂町へ住居を定め園村家から姉弟の荷物を引取つて、新なる生活に入つたのである。

八十

さても其後さるほどに、英京倫敦へ赴任した園村関は、大使館内の官舎に棲むで、監督を托された日本留學生と米人の厨夫と十四五になる小使との四人で、至つて質素な生活を營むで居るけれども、関が外交上の手腕に至つては、我大使館内では無論、倫敦の外交官中で、早くも敏腕家として知られると同時に、交際界裡でも、花形として持囃されてゐるのであつた。

某日の事、関は例の如く大使館へ出勤して政務を執つて居ると、小使が一葉の電報を持つて來て。

「園村さん電報でございませう」

卓子の上に置いて去つた。関は直に手に取上げて披いて見ると

フツゴウアリ、テルエリエンシタ、イサイテガミ

と記した電文で、東京の實母の名で打電したものがあつた。平素は沈着家で、餘り物事に動せぬ男であるが、有繋にこの電報には一驚を喫して、電文を讀めたまふ、暫時は

茫然として爲すべき事を知らなかつた。が、漸く我に返ると共に、一大疑問と、不快の念とはむら／＼と頭腦に起るのであつた。

「不都合……不都合にも種々あるが、如何なる不都合を爲出来たであらうか……苟にも小兒まである女を、離縁して了ふと言ふに就いては、重大な不都合があつたに相違ないが、重大な不都合とは、如何なる不都合であらうか、法網に罹るやうな破廉恥罪でも犯したであらうか、いやいや彼の柔順な牝羊のやうな女が、何うして那樣大膽な心を出すものか……しかし、知らず識らずの中に、誤つて犯さないとはいへないが、それならば寧ろ同情すべきで、決して離縁なぞ爲すべきものぢやない……殊に依ると、女の道に背いて貞操を汚したのぢやあるまいか、或は然うかも知れない。それより外に離縁される事は無いと思はれる……」

と、熱と考へて居つたが。

「いや／＼、苟にも貞操を疑ふなんと言ふのは、私の僻見だ、他の罪科を犯せばとて、貞操を破るやうな女でない事は、確く保證が能る……照江ほどの貞淑な女で、しか

もあれほどの教育を受けた女が、何うして女の道を破るものか、貞操を破つて離縁されたのでは斷じてあるまい、在るべき理が無い」と、斷乎として否定して了つた。

「しかし、それならば、何がために離縁と云ふ、苛酷な嚴罰に處せられたのであらうか、何うしても想像する事が能ない」

又暫時想像に耽つて居つたが

「いづれ詳細の事は書面で通知はするであらう 如何なる瑕瑾が有つたとしても、私に一言の相談も爲ないで、勝手に離縁して了ふと言ふは、親の權利とは言へ、餘りに亂暴極まる話だ……何にしても、此まゝ打棄てゝは置れない、吁々困つた事が發生したものだね」

我と我が胸に問ひ胸に答へて、頻に苦悶するのであつたが、やがて決心したやう、電報用紙に左の如く認めて、小使をして打電の手續を爲せた。

デンミタ、イカナルリユウアルモ、リニンミアワセヨ、ヘンヤツ

八十一

照江を離縁した後の園村家は、比較的廣い邸内に、お濱と雪子の兩人のみとなつたので、其日の夕方から、小村の女中お辰が手傳に往つた、けれども照江を飯して了へば、賑かでもあり、兩家の經濟上の利益でもあるから、直に同居して暮す事に、勝子の提案で決定して居たので、翌日小林家は田町の家を疊むで、園村家へ引移つて了つた。この同居に就ては、老人と小兒のみでは無用心と言ふのが原因であつたが、成程用心の悪いは勿論であるけれども、勝子が同居説を提案した眞意を探つて見れば、闌が月七十圓宛送金して居るから、同居した曉は、母のお濱を説いて、一家の財政を己が手に握り、小林の俸給は及ぶだけ貯蓄して園村の送金のみをもつて、一家の收支に當る心底であつたのだ。

子守女を桂庵に頼むで置たのが、幸ひ同居した其日から來たので、雪子の保護は其女に托する事にした、年齢は十七で名をお松と呼び、田舎出の朴訥さうな女である。たゞに一家は主従を合せて六人暮しとなつたので、これまでの眠つた如き家庭と異つて、

活氣のある陽氣な家庭となつた

小林は移轉のために、官衙を休むで人夫を指揮して、道具の運搬を爲せて居たが、僅か五時間ばかりで、悉皆片附いて了つたので移轉の祝意を表すべく、母子三人酒宴を開いた

「永い間面白くない月日を送りましたが漸く目的を遂げて、お前方と一緒に暮せるやうになりましたので何だか蘇生つたやうに思ひます」

お濱が愉快さうな色を泛べて言つた

「色々御心配かけて相濟ませんでしたが、これからは自分のお好きな事をして、思ふ儘に遊んで下さい、家の事は何も彼も私が引受けて爲ますから、母様へ御心配決して懸けませんわ」

勝子が慰め顔に言ふ。すると小林もコップを手にしながら

「眞筒憎まれ役を勤めて頂いて相濟まないでした、其代りこれからはお理合に、芝居へなりと寄席へなりと、お好きな所へお出掛けなすつて、思ふまゝお遊びなすつて下さ

「い

「永く御門跡様へお参詣も爲る事が能なかつたから、これから時々お参詣を爲たりお芝居へも連れて往つて貰ひませうよ」

満足さうに言ふ

「貴母のお参詣好が、眞箇永い間お参詣もなさらなかつたわね、明日にも参詣して入来ッしやいよ」

「だけれども、まだ倅から何と言つて寄来すか知らと、それが心配でなりませんから照江の事が、すツかり片附いて了つてから、寛りと参詣爲ますよ」

「何と言つて来ても宜いちやありませんか離縁して了つて、荷物まで返して了つたものが今更何うなるもんですか、関の方は少しも御心配なさなくても、私共兩人が引受けて始末を着けますから、安心して居らッしやいよ」

勝子が事も無げに言ひ放つた。

「何れお前方に頼まなきやならないけれども、関が得心して了ふまでは、何うも氣が沈

着かなくつてね……………」

「何有関さんの方は御心配なさらなくとも何か言つて来たらば、私共で得心の行くやうに言つて遣りますから、どうぞ安心なすつて下さい……………」

小林が同じ事を言つて慰めて居ると、下女のお辰が入つて来て、

「電報が参りましたとございます」

と、勝子へ出した

八十二

「何方から来たんでせうね」

言ひつゝ、勝子は電報を、良人健太郎へ渡した。小林は名宛を眺めて、

「これは私へ来たんぢやない、お母様へ来たんだから、屹度関さんが寄来したんかも知れない」

言ひつゝ、封を披いて讀むのであつた。

「彌張関さんが寄来したんです」

お濱と勝子は杯や箸を下に置いて、

「何と言つて来ましたか」

お濱が不安さうに問へば、勝子も同じやうに、

「え、ッ」

と問ひかける

「電報は見たが、言う何ふ理由があつても離縁する事を見合せよと言つて来た」

小林が電文を聞かせた、

「まあ、随分な事言つて寄来ましたのね、それほど照江が好んでせうか、呆れて了ふわ」

勝子が忌々しさうに言ふ、

「だけれども、彼の電報には不都合があつて離縁するとのみ認めてあるんだから、書面が届くまでは、何う言ふ不都合があつて離縁爲たのだから、詳しい事情が分らない筈だから、固々好で貰つた妻でもあるし、小兒まで在る中だから、見合せよと言つ

て来るのは、決して無理の無い事だが、しかし何と言つて来た所で、今更何うする事も出来ない次第だから、もう歸して了つて、何も彼も手續を履ひ了つたから、見合る理に行かないと言つて遣らうよ、然うすれば、止を得ないと思つて諦めて了うだらうよ」

小林が電報を手に持つたまゝ意見を述べる、するとお濱が團扇を笏の如く構へ、微塵の顔を突出して、

「許して置けない不都合が在つたので離縁して了つたのだから、今更見合せる事は出来ないから委細の事は手紙を見れば分ると言つて遣つて下さいな」

「宜しうございます、直に返事を聞せろと書てありますから、然う言ふ様に返事を出す事に致ませう」

「では、お母様は苦勞性だから、召上つて了ひなすつたらば、直に電報を認めて下さいな、私が散歩ながら打つて來ますわ」

勝子が笑ひながら言へば、お濱も微笑を洩らして、

「此事が落着して了はなくては、眞箇私は落々寝る事も能かねるから、成るだけ早く返事を出して遣つて下さいね」

「承知致しました、御飯を食て了ひましたら、直に認めて出しますせう」

三人は又、差つ、差されつ、寸時く酌交した後、やがて夕飯を喫了つた。

小林は直に己が室に入つて、電報を認むべく机に向つた。而して醉眼を睜つて左の如く認め

ユルサレヌフゴウアリ、リエンシテ、コセキマデカエシタ、イマサラミアワセル
コトダメ、イサイテガミ

小林は電文をお濱勝子の兩人へ讀聞させた後、買物かたぐい打電すべく、勝子と共に外出した。

八十三

二時間ばかり経つた頃、小林夫婦は夏向の窓掛など買つて歸つて来た、見ればお濱は泣いて居る雪子を頬に宥め透して居る。けれども雪子はなかく泣き止まぬので、

勝子が入替つて、

「雪ちやんや、お前はお伶俐だから那樣に泣くもんぢやありませんよ、さあ〜叔母様が宜い物上げるから、ちやんと泣止なさい……ちやんと……」

透すのであるが少しも聞入れない。

「母様……母様が居らツちやらないん……でつもの……母様呼んで頂戴よ」

泣きながら慕ふのである。守役のお松は當惑顔して傍に座つて居る。

「諾々、母様呼んで遣るから、那樣に泣くもんぢやありません、ちやんとお止めなさい……泣くと母様可厭だと言つて来ませんよ、お伶俐だからちやんとお止なさい」

勝子が諭すように宥めると、小林が眉を擡めて、

「困つたもんだね、那樣に母様々々と泣かれた日には、堪つたもんぢやないが、何うにかして忘れて了はす方法は無いものか知ら……」

「なに貴方、まだ離れたばかりですから、這様に喧しく言ひますけども、五六日も経てば小見ですもの、直に忘れて了ひますよ」

勝子が答へた。お濱は雪子の顔を覗くやうにして、

「叔母様が宜い物を遣ると仰やるから、もう泣くのぢやありませんよ」

代るく宥め透されたので、雪子は遂に泣止むで了つた。勝子は笑ひつゝ其肩の邊へ手を添へて、

「能く泣止みましたね、もう母様々と泣くぢやありませんよ、叔母様がお旨味お菓子上げるからね、お菓子を食べて、お松とお人形を出して順しく遊ぶですよ。ね宜ござんすか」

言ひつゝ奥の方へ連れて入つて、美事な西洋菓子を紙に包むで與へた。而して辭優しく「これを食べ、お松と人形を出して彼方で順しく遊ぶですよ、ね、宜ござんすか」雪子は無言のまゝ菓子包を手にして、お松の居る室を差して出て往つた。勝子は其姿を見送りつゝ、邪魔者と言はぬばかりにチヨツと舌打して、其まゝ良人の室へ往つた。小林の室には電燈が灼然と輝き度つて、小林が胡座を掻いて、團扇を使ひながら庭園の面を眺めて居た、

「をや、母様は入來ツしやらなかつたんですか」

問ひかけつゝ座つた

「母様？ 母様は彼方に居らしたぢやないか」

「それは知つてますけども、私此方へ入來したと思つたのですよ」

言ひつゝ同じやうに團扇を取上げて、寛に煽ぐのであつた。ところへお濱が入て來て「雪子を賺すのに、びつしより汗が流れて來た。お前方が出掛けて往くと、間もなく母様々と、母様の一百も言續けて、あの通り泣通に泣通して、何と言ひ聞しても泣止まないの、甚麼に骨が折れた事やら飽々爲て了ひました」

勝子の傍へ座を占めた。

「無理も無いんですが、しかし強情でもあるんですよ。いくら親が居なくなつても、那様に泣く兒ッてあるもんぢやありませんわ」

勝子が忌々し氣に言つた。

お濱も團扇を動かして頻に風を呼びつゝ、

「しかし、相川のお嬢様も、那麼大きな小兒が居ては、困つてお了ひなさるだらうね」

「だつて貴母、小兒のある事も、何も彼も承知の上で來たいと仰やるんですもの……可厭なに相違無いけども、其位な辛抱は覺悟して居らッしやるんですよ」

勝子が良人の顔を見ながら答へた。

「それは然うか知らないけども、繼子と言ふものは大層邪魔になると言ふからね……」

それは然うと、お前さん、お嬢様へ照江の事を知らせて遣りましたか」

と、お濱が思ひ出したやうに問ひかけて、其顔を眺めた。

「いゝえ、まだお知らせ爲ないんですよ」

「まあ、早くお知らせ申すが宜いぢやありませんか、甚麼にお歎びなさるか知れないよ」

「直にお知らせする意で、手紙を書きかけたんですが、丁度其時貴母から、照江の父親

が來たと云つて、呼にお寄來しなすつたもんだから、早く上らなきやならないと思つて、書半の書面を其まゝ懷中へ入れて、慌て、上りましたので、不斗氣が注いで懷中を捜して見ましたが、俥の上で落したのか、此方へ來てから遺としたのか、落として了ひましたので、其ツきり忙はしくツて、得お知らせ申さないで居るんですわ」

すると今まで黙つて涼むで居た小林が、やや體を斜に勝子を見ながら、

「甚麼事が書て在つたのか知らないけども、那樣書面なぞ輕卒に取扱ふと言ふ事があるものか、他に見られて不可いやうな、秘密な事でも書てありは爲なかつたのか」不安さうに問ねた。

「別段他に見られて悪いやうな事は書て無かつたんですけども、唯照江を離縁して了つたから御安心して下さい、詳しい事はお目に懸つてお話爲ます、とそれだけの事を書て置いただけです」

と答へた。小林は驚き顔に、

「離縁爲て了つたから、安心して下さいなぞと書てあつたんならば、他に見られたら大變ぢやないか、何處で落したか分らないのかい」

「はあ、取急いで傳で駈附たもんですから何處で遺としたか、少しも知れないんですよ、照江の父親と談判して、歸して了つた後に、漸く氣か注いて、捜して見ましたけれども、其時はもう遺した後で、同う捜して見ても無かつたのです」

「お前にも似合ない不注意千萬な事をしたもんだね、宛名が書てあつたらうね」

「いゝえ、まだ書半でしたから、名前は私のも先方のも書て無かつたんですよ」

「署名して無かつたのは何よりだが、照江等に拾はれてもすると、狂言の内幕が露顯爲ないとも限らないからね」

「豈夫照江等に拾はれば爲ないと思ひますけどもね……」

「不安相に言つて考へ込む。お濱も心配氣な顔して聞いて居つたが、」

「書面なぞは、何うして他の手に渡らないとも言へないから、お前がお目に懸つてお話し爲た方が何より確ですよ」

「注意を與へた。」

八十五

「は、もう移轉も済むで了りましたから、明日にも一度お目に懸つて來ますわ」

小林はやがて卷蕘を喫し始めたが、煙を吐き出しつゝ勝子に向ひ

「しかし、お嬢様にお話爲るのは可いが、これから前途が希望通り行けば宜いけども非常な難問題だから、成功が覺束ないと思ふのだ」

と、有繋に悲觀する。この辭にはお濱も同感の意を表して、

「其事に就ては、私も心配してるのですよ、俵が先刻のやうな電報寄來す位ですからなかくハインソレと承知爲まいと思ひます」

「何故かと言ひますと、照江さんと結婚する當時も、相川の方を勧めたんですが、斷乎と斥けて照江さんと結婚して了つたほどですもの……餘ほど旨く勧めなきや、容易な事では承知爲ませんよ」

小林は、益々自説を主張する、勝子は兩人の辭を聞くと不愉快な顔して、

「那樣意氣地の無い事を仰やつて何うする意なんです、無理壓制にも承知爲せなきやお嬢様ばかりぢやない、御両親へ對して合す顔が無いぢやありませんか、表面こそ知らない顔で居らつしやるけども、内實は閑とお嬢様と結婚するのを條件として、此方の頼みを快く承入れて下さつたんです……高等官に成つたのを、自分の力で成つたやうに考へてると、それこそ甚麼憂目を見せられるか知れないんですよ自分共の軀が大切であつたらば、甚麼思しても、是非閑を得心させて、約束を果さなきや、今日まで苦心爲たのが、皆な水の泡になつて了ひますよ。ですから、今が今と言つては、外國に居る事でもあるし、逆も承知は爲ないでせうけれども、追々に承知させるやうに、第一母様から勸めて下さらなきや困りますよ、それでなくちや、照江を苛め出したつて、何の役にも立たないぢやありませんか」

聲に力を入れて如何にも焦つたさうに言つた。お濱はそれを制するやうに眼を睜つて「まあ、那樣大きな聲をして、誰が何處に聽て居ないとも言へないに、成たけ辭に話

すが可いよ」

「だつて、貴方等のやうな暢氣な事言はれては、相川様へ對して私が濟ないぢやありませんか」

「何も暢氣な理ぢや無いけども、容易に諾と返辭を爲まいと言ふお話ですよ」

お濱が言譯らしく言ふ。

「だから、尙更骨を折つて勸めて下さらなきや困るぢやありませんか、それも是も皆な我々共のためですもの……」

「それはお前の言ふまでではない、私もこれまで力を添へて遣つたのだから、無理にも勸めてお前方の首尾の宜いやうに、結婚爲せる量見では居ますけれども何を言つてもヤレソレと早い間には合ひませんよ」

「早くなくつても、閑に承知さへ爲せて下さりや、其以上の希望はありませんが、其承知させるに就て、私の考へを話せば恚うなんです。閑は私共と違つて、物の能く解つてるだけに、非常な親孝行ですから、母様が恚うだと言つて勸めて下されば、

可厭だと思つても、大抵な事は我慢して承知するに極つて居ますから、母様からお嬢様の事を、賞立て、話して頂いて、是非後妻に貰へと無理にも勧めて頂くんです。然うすれば雪子も在る事だから、少々位な不足は小兒に免じて、屹度承知するであらうと思ひます」

十六

お濱はやゝ得意氣に悠々と團扇を揺かしつゝ、

「それは私も然う思ふて居るけれども、彼地に居る中は、勸めて見たところが、到底駄目だと思ふから、何も彼も日本へ歸つて来た後の事ですよ、それまでは、待遠くとも待つて頂くより致方がありませんから、お前から能く事情を話して置くが可いよ」

「其事は話しても置きますが、お嬢様も覺悟して居らつしやるんですから、結婚が能ると知れてさへ居れば、關の歸朝するまでは、大丈夫待つて居らつしやるんですよ」

吞込顔に言ふ。小林は沈黙して頻に巻簾を喫して居る。

「では、何事も伴が歸つた後の事として、照江達は何う爲たらうね、まだ此方に居るであらうか、それとももう連れられて國へ歸つたらうかね」と問ひかけた。

「然うですね、國男も暑中休暇で遊んでゐるのだし、那麼に早く荷物を引取つたところを見ると、もう今日あたり一緒に歸るのかも知れませんか」

勝子が答へた。

「又照江の事を云ふと、お前に叱られるか知れないけども、有繋伴が見込むで貰つたわけあつて、離縁はしたものの、那麼良い嫁は捜したからつて、なか／＼有るもんぢやありませんよ、縹緞と言ひ、意態と言ひ、眞箇感心して了ひました、伴が惜むのも決して無理はないと思ひます、相川のお嬢様は何う言ふ方か知らないけども、どうか伴の氣に入れば宜いがと、それが氣遣はれますよ」

偽らない心中を語つた。此辭は無慈冷酷の勝子が胸にも一種異様の感を與へて、始めて

「憊う言ふ辭を發せしめた。」

「今日までは、邪魔になるので、憎い／＼とばかり思ふて居ましたけれど、憊うして離縁して了つてから考へて見れば、眞箇缺點の無い、良い嫁でしたわね、關にも濟まないし、照江にも氣の毒ですけれど、相川のお嬢様の心中を察すると、ツイ又可愛相になつて、假令照江を歸してもと言ふ同情心が起つて來るのに、宅を何うにかして昇進させたいと言ふ慾心も出て來るもんですから、到頭憊う言ふ騒を起す事に成ましたが、しかし、照江ほど美しくは無いけれど、十人並以上の御標致で、なか／＼お伶俐な方ですから、關の嫁に爲たからと言つて、少しも不似合な夫婦ぢやありませんよ」

「私はまだお目に懸つた事はありませんから、何う言う御標致で、何う言ふ御氣質の方だか、一向知らないけども、一萬圓と云ふお金を持つて來て下さると、立派な家で育つた方だから、伴の嫁にしても不足はあるまいと思つて、お前から言はれるまゝに、ツイ其氣に成つて、憊う言ふ事に爲しましたが、思へば罪の深い事を行りました」

「た」

後悔する如く言つて太息を漏した。

「もう、這麼お談話は含さうぢやありませんか、何だか氣が滅入るやうで、可厭な氣になりましたわ」

勝子が言つた。

「本當だね、移轉早々縁起でもない、もう這麼話は含ませう、含ませう」

八十七

「御免下さいまし……」

低い聲で訪ひつゝ、歌子の室を密と覗いたは勝子であつた。越後上布の緋の帷衣に、七珍織の單帯を締めて、例の緩く波の打つた髪を、美しく鬘に結び上げて、一刷毛薄く化粧さへ凝して居る。それと認めれた歌子は零れるばかり愛嬌を湛へて、

「まの、姉様何う成すつたの、随分ぢやありませんか、もう今日で九日入來しやらない事よ」

勝子は微笑しつゝ座に着いた。

「能く覚えて居らつしやる事ね、唯今奥様からもお小言頂いたんですよ」

「餘り入來しやらないから、昨晚指を折つて見たら、八日になるんですもの……私
今日はお訪ね爲やうと思つてましたのよ」

言ひつゝ勝子の髪の格好から、扮装なぞを眺める。

「私も御無沙汰爲ましたから、お伺ひ爲なきやならないとは思つて居たんですけれど
伺ふに伺へない事情が出来たものですから、止を得ず、濟まないと存じながら失禮
して居たんですよ」

「屹度お忙しい事がお在んなさるんだとは察して居ましたけれども、毎日のやうに入
來して居たのに、九日も十日も入來しやらないと眞箇心配ですわ」

「今日は其のお詫を爲たり、伺へなかつた事情をお話申さうと思つて上がつたんです
よ」

言ひつゝ、白麻のハンケチを取出して額の汗を軽く押へる。

「何か變つた事でも有つたんですか、豈夫那樣事は無いんでせう」

「ところが、有も有も大變な事が有つたんですよ。まあお話申しますから、お聞き下
さいまし」

と、照江を離縁して了つた事、園村家へ同居して了つた事など、始終の顛末を物語つ
た。歌子は呆れた如く、眼を睜つて聞いて居たが聞了ると共に、

「まあ驚きましたね、僅かばかりの間に、眞箇大變な騒があつたんですね」

言つたが、顔の何れにか隠し果せない歡喜の色を泛べて居た。

「然う言ふ次第で、漸くまだ昨日移轉ばかりだものですから、本當には取片附が濟
まないんですけれど、早く上つて照江の事をお知らせ爲やうと存じまして、お詫旁
々お伺ひ爲ましたんですよ」

「私ゆゑに、種々心配かけて相濟みませんけれど、御恩は決して忘れませんから、此
上共に宜しくお願ひ申しますわ」

「何う致しまして、私の願は早速御盡力下さいましたのに、私の方はいつまでも、遅

々して居て、相済みませんけれど、御承知の通り、種々手数の要る厄介が纏つてるものですから、オインレと早く運ばなくつてお氣の毒ですけれど、一等難かしい問題だけは漸く解決爲ましてございますから、此次は時機を見計ひまして弟に快く承諾させやうと思つて居りますから、お待ちしいでせうけれど、どうか今暫くお待ち下さいまし、其内には必ずお約束を實行爲ますでございますし」

「私のお願は、始から無理と知つて居てお願ひ申したんですもの、希望通りに行くのが不思議な位なものですわ、心の中では到底難くない希望と断念めて居たほどですから、願を承容れて下さるならば決して急は爲ませんから、時機を見て寛りと御相談なすつて下さいまし」

八十八

さても照江國男の姉弟は、園村家を去つて翌日赤坂靈南坂町へ居を定めて、園村家から荷物萬端を受取つて、父の大佐と共に、對翠館より引移つた。大佐は家の内外を眺め盡した後、

「こりや、なか／＼好い家ぢや、十二圓どころぢやない、十五圓の價値は確にある、勉強するには最も適當な場所だ、退屈になつたら、庭へ出て散歩が出来る、室取の工合も誠に都合好く出来て居るし、お前等二人には注文通の家ぢや」
氣に入つたと見えて非常に賞立てた。

「は、勉強するにはこの通り閑静ですから眞箇都合が宜ございますわ」

照江も歡ばしげに答へた。すると國男が勇ましさに、

「姉様の室を六疊に定めて、僕の室は四疊半に極て置ても宜いでせう」

照江の顔を見た、

「あゝ宜いとも、姉様は何所でも厭はないから、お前が勉強するのに、氣持の宜い室に極る方が可いよ」

「僕四疊半が丁度宜いんですから、それぢや四疊半と極て置ます。八疊だけは客室に空て置かなさや、來客の在つた節に困りますからね」

「來客なんか居るもんですか、私共の此處に居るのは成だけ秘密にして、他に知られ

ないやうに爲なきやならないんですもの……」

大佐は何事か考ふる如き顔をして、無意味に巻簾を喫して居つたが突然、

「照江は勉強するも可いが、其軀で勉強爲た日には、それこそ甚麼病氣に罹るかも知れないから、健康が舊に復るまでは、保養を專一にして、勉強は其後の事に爲るが可い、いくら勉強爲ても、軀が虚弱ちや何を爲る事も能かぬからね」と誠めた。

「はい、自分でも軀の弱つて居る事は能く知つて居ますから、暫時は暢氣に保養爲まして、舊の軀に成つてから、勉強爲やうと思つて居ます」

「だが一體何をして永い一生を暮す目的で居るのだ」

照江はやゝ答に躊躇して居つたが、やがて、

「私少し勉強爲まして、高等女學校の教諭になる試験を受けました上で、一生を教育に委ねて了ふ決心でございます」

答へた。

「では何うあつても再縁は爲ないと言ふのぢや喃」

「はい、再縁して辛い悲しい思をするよりか、學校へ奉職して氣樂に一生を送る考へでございます」

「然う決心爲たものなら、目的通り遣つて見るも宜からう」

とは言つたが、まだ香はしい花の姿を、このまゝ孤獨に終らしめるかと思へば、何となく物足らない心もするのである。

照江は又思ひ出したやうに、

「お父様、園村の許へ此度の事情を、詳しく認めて送らうかと思ひますが、如何致しませう」

相談に及んだ。

八十九

大佐は暫時考へた後、

「離縁されない以前ならば、辯解する必要もあるが、もう離縁されて、何も彼も落着

して丁つたのだから、今更詳しい事情なぞ認めて送るのは、却つて未練がましく聞えるから、向後一切書面は出さない事にすることが可い」
 嚴乎として言渡した。

「はい」と順に答へた。しかし照江の心中を忖度して見れば、痕跡も無い濡衣を被せられて離縁されたので、少くとも相愛の中の関にのみは、詳しい事情を訴へて、無實の疑惑を解いて置たいと思ふのであつたが、將來の力と恃む父の辭に背く理には行かないので、遂に其まゝ思止つたのである。

「すると、私はもう滞在する必要が無いから、今夜の夜行列車で飯る事にするが、月々の手當は毎月二十五日までは送つて寄來すから、唯今も言ふ通り、照江は滋養になる物でも十分に食べて、當分は體の保養に注意するが可い」
 「はい」

「それから、今までと違つて、這度はお前等姉弟で借たので、この家に就ての責任は皆なお前等に在るんだから、萬事に注意を拂つて、失態の無いやうに爲なきやなら

ないぞ」

「はい」
 「殊に東京は國と異つて不用心だから、戸締などを嚴重にして、火の元も注意爲んければならない」

「はい」

「それから、明日にも寄留届を爲なきやならないが、照江の戸籍は一應區へ送籍して其上で無くちや手續が能かねるから、私が歸ると復籍の手續を爲て了ふて、四五日經過してから届けるが宜からう」

残る方なく注意を與へた後、幾干かの金を渡して置いて、其夜八時の急行列車に乗じて飯國して了つた。

大佐の飯つた後は、姉弟と下女のお鶴と三人のみとなつて、閑静な住居がいよいよ物寂しくなつた。折しも靈南阪教會で夜の祈禱が始つたのであらう、洋琴の音が劉曉と響き渡つて、哀れな聲で讚美する歌の聲が聞える。國男は已が室に入つて、本箱や机の

位置などを彼方此方と替て居る。女中は女中で室に入つて、行李の中から衣類などを取出して、一枚宛疊み直して入れて居る。照江は六疊の室で、團扇を手にしたまゝ庭を眺めつゝ、風に送られて移すが如く聞える、洋琴の音、讚美歌の聲を、耳を澄して聞いて居つたが、心淋しい可厭な氣が起つて、何だか憊う坐らに深く穴の底へでも滅入込むやうな感があるので、覺えず溜息を吐いて、

「あゝ……可厭だね……」

一聲嗟嘆の語を洩したが、それと同時に手にした團扇を棄てるが如く投げ出した。かくて優に艶なる中形沿衣の袂を、膝の上に重ね合せて、又苦悶に堪へられぬ如き溜息を洩らしつゝ、何事か思案するのであつた。が、やがて、

「可愛相に雪子は何うしてるか知ら……定めて彼の意地悪い祖様母に叱られて、母様母様と泣いてるであらうが……何うして世の中は這麼に任意ならぬものか知ら……」

……呶々何うかして顔が見たいね……」
口の中で呟いた。が、又思ひ返したやう、

「いや〜……這麼心細い事では不可ない……去られて飯つた上は他人も同様だ……」

呶々思ふまい思ふまい」

我と心を制へるのであつた。

九十

英京倫敦の官舎に、返電の到着するを、鶴首して待受けて居た園村閑は、いつも退館の後は、日英俱樂部に出掛けて、鬪球を試むるか、さなくば、公園に散策するを例と爲て居るが、照江離縁の通知に接して以來悶々の情に堪へないので、外出も爲なければ、來訪の客も謝絶して、唯椅子に凭つたまゝ浮立たない顔をして考へ込むで居る。事情を知らない召使などは、非常に心配して種々の噂を爲合つて居る。

「ね、村山さん、且那一體何うされたんでせう、あれほど元氣の宜い方が、非常に勢が無いちやありませんか」

厨夫が小使に言へば小使も、

「且那が那麼に茫乎されてるのは、這度初て見たが、何かしら非常な心配事が出来湧

いたに相違無いと思ふのですよ。さもなければ、大使館中で一等元氣の宜い方が、あの通り沈むで居らッしやる理がありませんからね」

と答へた。

「旦那が沈むで居られると、我々までが何だか不愉快で可厭なもんだね」

「真箇變に氣が沈むで可厭だね。と言つたところで、我々が何うすると言ふ譯にも行かないが、まあ慙ふ云ふ時には、君に奮發して腕一杯の料理でも作つて、御機嫌を取つて貰ふより外、何うして可いか慰めやうがないね」

「私も然う心得たので、今夜こそは旦那が吃驚されるやうな料理を差上げやうと思つて、此通り準備に取懸つてるところですよ」

微笑しつゝ、料理の材料を示すのである。ところへ呼鈴が消魂しく鳴るので、小使はあたふた主人の室へ往つた。

閑は相變らず不愉快さうな顔して居たが、小使の顔を見ると、

「厨夫に然う言つて、何か麥酒の肴になるやうな、旨い物を作らせて、ビールと一緒に

に持つて来て下れ」

酒でも飲むで不快を打消すために命じた。

「はい、承知致しました」

小使が室を出かけると、

「成たけ早くと云つて呉れ」

「はい」

給仕は室を出て厨屋へ往つたが、主人の命を厨夫に傳へて料理を急がせた。間もなく厨夫が心を籠めた料理が出来たので、其旨を閑へ告げた。閑は直様食堂に入つて、やがてビールを呷りつゝ、料理を食するのであつた。かくてやゝ陶然とした頃、待焦れた電報が来たので、手早く披いて見ると、一層絶望の電文であるから、腹立たしさうにペリッとして二つに裂いて、其まゝ衣兜の底へ押込むで了つた。

「許されぬ不都合……豈夫彼女に限つてはと確信して居たが、扱は女の道を破つたと見えるね。既に送籍の手續まで爲て了つたと言へば、今更何と言つたところで止

を得ない話だ。此上は書面の到着を待つて事情を知る外は無いが、しかし、離縁した以上は書面を見たところが、六日の菖蒲だ……日々女子と小人は遂に養ひ難いだね、もう思ふまい、思ふたところで何の効も無い理だ」

又もビール數杯を傾けた後、平常の閑に復つて元氣宜く外出して了つた。

九十一

照江を離縁したと聞かされた歌子は、半ば我戀の達せられた如く感じて、密に結婚の成の日を胸に描きつゝ、非常の愉快を覚えて、翌日は美しく装ふて小林家を訪れた。小林は既に出省した後で不在であつたが、勝子は下女の知らせに、欣々と出迎へて、八疊の客室へ案内した。すると歌子は舌怠い調子で、

「あら姉様可厭よ、他人行儀に改つてお坐敷なぞへお通しなすつて、貴女のお室で可いちやありませんか」

睨むやうな眼色をして眺めた。

「ですけれど、唯今一寸母が御挨拶申したいと言つてますから、どうか此方で會つて

だけ下さいまし、すると失禮して私の室へ御案内申しますわ」

辭の終るか終らぬのに、お濱が静々と入て來た。而してやゝ隔つた末座に着いて恭しく兩手を下げて、

「これは、能くこそお越し遊ばしましてごさいます、私は勝子が母の濱でございませぬ、小林始め勝子まで、一方ならない御厄介に預りまして、御禮の申上げやうもございませぬ、有難う存じます、本來一度お屋敷へ伺ひまして、御禮を申上げなきやならないんでございませぬ、また時機を得ませぬで失禮して居りますけれど、

此上ながら何分にも御力添のほど呉々お願ひ申上げますでございませぬ」

挨拶した、歌子も容儀を正して、やゝ席を下つた。

「始てお目通り致します、私は歌子と申す不肖女でございませぬ、行末永くお見知置

き下さいますやうお願ひ申します」

頭を低く挨拶して、

「餘り遠くもございませぬから、お姉様と御一緒に是非お遊にお越し下さいまし、汚

くは致で居ますけれど、閑静な事は至つて閑静でござります」
 溢るゝばかり愛嬌を泛べて言つた。

「はい、有難う存じます其内何れお禮旁々伺ひますでござります、どうか御寛りとお遊びなさつて下さいまし」

「は、有難う存じます」

お濱は挨拶のみで室を去つた。歌子は勝子に向つて、

「貴女の母様だけお在んなすつて、お優しいお方ですことね、私やがて自分の母様に成つて下さるんだと思へば、本當に嬉しい事よ」

微笑みつゝ如才無い甘言を弄す。

「田舎者ですけれど、お人良だげが取得なんですよ……さあ此方がお可厭なら、取散

して居ますけれど、私の室へ参りませうか」

「は、始めてだから姉様のお室も見せて頂戴な」

「では御案内申しませう」

連立つて客室を出て、廊下傳に勝子の室と定めた六疊の室へ入つた。

「まあ宜いお室ですことね、第一このお庭が好いちやありませんか」

「関が東京に居ます頃は、この庭が好だと言ひまして、この室を書齋に爲てたんですよ」

「まあこの室を……懐慕い事ね……」

熟々と見回すのである。折しも庭の青葉を縫ふて颯と涼い風が室に流れ込むだ。

「お、好い風の入る事……私這麼室になら毎日だつて来て居たいわ」

と嬌然する。

九十二

勝子も笑ひつゝ、

「那樣に御意に適ひましたら毎日入来しやいましたな、遅かれ速かれ来て頂くんでもの、今から貴女のお室にお譲り爲ますわ」

「本當に私早く然う言ふ身に成りたいわ……だけれども、関さんが私のやうな者は

「お可厭だと仰やりは爲ないでせうか、それが心配なんですよ」
急に消氣返る

「那樣御心配なさらなくても大丈夫ですよ弟は至つて親孝心ですから、母が憐れうだと
言つて勧めましたら、決して可厭と言つて逆ふやうな人ぢやありませんわ、殊に貴女
今日では小兒も在る事ですし、必然唯と承知するに極つて居ますけれども願はくば
それまでにお可厭でせうけれど、小兒と仲能く成つて居て頂きたいと思ふのですよ
然う致しますと、小兒をカセに勧めますと、否應無に得心させられて大層都合が宜
いんですわ」

「私小兒は至つて好ですのに、閑さんの小兒ならば尙更ですから、甚麼にでも可愛が
りますからお宅に居らつしやるんならば、一度合せて下さいませんか」

「は、何うぞ會つて遣つて下さいまし、彼方で遊んで居ますから、唯今連れて参りま
すわ」

勝子は立つて室を出た、而してお濱の室を覗いて、

「雪子は何方に居るでせうか」

問ひ試みた、お濱は茶器を取出して、それに一々布片を掛けて居た。

「書生部屋で遊んでると思ふがね、お松は一寸風月までお菓子を取に遣つたから、多
分一人居るでせうよ」

「然うですか、お嬢様が一度見たいと仰やるもんですから、連れて往つてお目に懸けや
うと思ひまして」

言ひ棄て、書生部屋へ往つた。密と覗いて見ると、果して雪子が一人、身邊に種々の
玩具を列べたまゝ、手に何か持つて靜に眺めて居る。

「雪ちゃん、お前何爲てるの大層大人なことね」

聲をかけた、雪子は突如に辭をかけられたので、吃驚しながら手にした品を手早く懐
中へ入れて、

「お人形出して遊んでるんでつよ」
と振向いた。

「叔母様がお前の母様の處へ連れて往つて上げるから、早く入来しやい」

母に會はせると聞かされた雪子は、躍らんばかり歡んで立上つて、勝子の傍に進むた

「母様、何處に居らつちやるの！」

問ひかけた。

「彼方に居らつしやるから、さあ早く入来しやい、お衣物着換へて、一緒に連れて往つて上げるわ」

手を引いて一室へ入つたが、荒い通綾の單衣を着せ、羽二重絞の披帯を締めさせてやがて己が室へ連れて入つた、雪子は先刻手早く懷中へ入れた品を、勝子に認められぬやう、巧に又懷中へ押入れたのであるが勝子は知らなかつた。

勝子の室へ入つた雪子は、遂に見知らない女が座つて居るので、不思議相に眺めつ、羞かしさうに勝子の傍へ可愛く坐つた。

「まあ、何と言ふ宜いお兒さんでせう、お父様に酷似ですことね」
歌子が賞めながら熱く讚める。

九十三

伶俐な雪子は、賞められたゆゑに一層羞含むで、やゝ俯目になつて、膝の上に乗せて居る牙彫のやうな己が手を睜めて居る、勝子は歌子の辭を打消すやうに、

「何う致しまして、醜女ですけれど、今更致方がないんですよ」

言つて更に雪子に向ひ、

「雪ちやん、お前何うして那樣に羞かしさうに爲てるの！えゝ、誰方が入来しても能くお話爲るぢやありませんか……此處に居らつしやるのは、これはお前の本當の母様ですよ……この間まで居たのは彼女はお前にお乳を飲ませて貰うために、頼むで來た他所の小母さんですよ、これから後は、この方を母様と言ふのですよ、宜ござんすか」

事を分けて言ひ聞かせた。歌子は満足ながらもやゝ羞かしげに見えた。雪子は漸く顔を上げて、不審相に歌子の顔を眺めて居つたが、

「嘘言ですよ、雪子の母様と違ひまつよ、餘所の小母様でつよ」

否定して了つた。兩人は思はず顔を見合つた。が、勝子は再び、

「餘所の小母様ぢやありませんよ、此方が雪子の本當の母様ですよ」
言ひ諭した。

「嘘言でつよ」

なかく信ずる様子は無い。すると、這度は歌子が嬌に笑ひつゝ、

「嘘言ぢやありませんよ、私が雪ちやんの本當の母様ですよ」

優しく言ひ聞かせた。すると先刻の羞含むだ様子もなく、

「嘘言でつよ、私の母様此所に居らつちやるんでつよ」

と、愛らしい手で胸のあたりを軽く押へる、兩女は不思議に堪へぬやう、均しく視線を注ぎつゝ、

「此所つて何所に居らつしやるの！えゝツ」

覗くやうにして勝子が問ねた、

「此處に居らつちやるんでつよ」

遂に胸を舐と押へた、餘り意外な事を言ひ出したので、勝子は不審の眼を睜つて、

「どれ、何處に……叔母様にお見せなさい」

と迫つた、雪子は今更後悔の色を示して、胸の上を押へたまゝ、蕩けるやうな愛らしい眼を、バチ／＼させて沈黙して了つた。

「えゝツ、何處に母様が居るの、叔母様に教へて下さい……此處の中に居るの？」

勝子は遂に雪子の懷中に手を入れて一葉の寫眞を引出した、而して眺めて見ると、其は寔に照江の盛装した半身像であつたから、呆れ顔して、

「まあ、御覽なさいまし、呆れるぢやありませんか、照江の寫眞を懷に入れてるんですよ……憊うも戀しいもんでせうかね」

歌子の顔を見る、雪子は慌てゝ、

「私の母様でつよ、返ちて頂戴……」
と手を延ばす、

「へえ……お幼少のに感心ですね、これぢや信用なさらないのも道理ですわ……這度

お懶巧な方始めて見ましたわ、有繁閣さんのお兒様ですね」
歌子も舌を巻いて驚嘆した。

「まだ満足に舌も廻らない癖に、全で大人のやうな事爲るぢやありませんかね」

「迎もこの方は、私のやうな馬鹿には、育てられないかも知れせんわ」

歌子は既くも雪子の尋常ならざるを覺つて、深く杞憂を懐くのであつた。

九十四

離縁後の照江は、嚴父の辭を守つて、一向身體の孱生に留意した、めに、半月ばかり過た頃は、餘ほど肉附も宜くなる、色艶も宜くなつて、殆んど以前の體に快復した。けれどもこれは肉體の恢復に過ぎぬので、精神上に受けた傷手は、容易に恢復せぬばかりか、寧ろますます其疵口を腐爛せしめつゝあるのである。ために、肉體美も整ひ色艶も麗はしくなつたに拘らず、顔の何れにか曇の影を留めて、晴々とした昔の面影はない。それも決して無理ならぬ事て、今日では姑小姑の冷酷な待遇こそ逃れ得たのであるが、渾身の愛を捧げて居た良人の事を追想し、可憐の愛兒を思ひ出す毎に、何

時も袖に涙痕の乾く事としては無く、時としては夜半の枕に、其面影が通ふて、夢に泣き現に悲しむ事も度々あるのである。

八月十五日の夜であつた。日中は堪へ得られぬ酷暑で、草木の枝葉もために萎垂れるばかりであつたが、夕方から戦々と涼しい風が出たので、終日室内に苦熱と戦つた照江は、浴した後、浴衣のまゝ庭に出て、涼臺に腰を掛けた、而して徐に吹き送る涼風に、擅に髪の手を言はず、雪の膚と言はず、心行くまで弄らせつゝ、折から照り渡る半月を眺めて居たが、やがて苦しうな溜息を洩らして、

「雪子は今頃何を爲てるか知ら……あの意地悪の祖母様の傍に、つまらなさうな顔をして、小さくなつて座つてるか知ら……何だか憐れな姿が、眼の前に見えるやうな心がする。園村家の一人娘に生れて現在立派な親が在りながら、親の慈愛を受ける事が能なくて、他人にも劣つた無慈悲な祖母様の傍に居なきやならないと言ふは、何とした不憫な者か知ら……定めて私を怨むで居るであらうね……」

言ひ了つて又苦悶の太息を吐いた、月はいつしか通雲に掩はれて。一面に仄暗い、と

ころへ黄昏頃から散步に出掛けた國男が歸つて来た。
 「姉様、今晚は奇らしく好い風があるでせう……散歩すると實に宜い氣地なんですよ」

照江は呼び覺まされたやう、ツト國男の方を眺めて、

「真箇宜い風だね、私餘り日中が暑かつたものだから、先刻から涼むで居るのよ……お前さん何方へ往つて来たの？」

「僕ですか、僕は方々散歩して來ましたが、姉様……妙な事を見て來ましたよ」
 言ひつゝ、國男も庭下駄を穿いて涼臺の上に來た。

「然う、何か珍らしい物でも見て入來して？」

「僕ね、暫時往かなかつたので、ぶら／＼と清水谷公園へ散歩爲ましたから、ツイ園村の様子を見る氣になつて、密と戸外まで往つて見ましたが、驚くぢやありませんか、小林健太郎と記した、大きな標札を門に懸けて、園村の標札は、同居かなんかのやうに、其下方に懸けて在るんですよ」

告げた、今の今まで雪子の事を思ひ續けて居た照江は、覺えず標を掻合せて、

「へえ……それは意外ですね……それでは小林の家が引越して來て同居爲たんですね」

如何にも呆れた様子である。

「僕暫時立つて内の様子を聞いて來ましたが、臺所の方で密々と話聲が聞えるばかりで、寂寞としたもんですよ」

「へエ……雪子の聲も聞えなくつて？」

九十五

國男は單衣の袖を捲り上げて、

「僕も實は、雪子の様子が見たいと思つて寄つて見たんですが、雪子らしい聲も聞えなかつたんですよ、豈夫まだ寝る時間ぢやないんですか、何うしたんでせう……意地悪い人達ばかりだから、暗い所へ入つて小さくなつてるんぢやないでせうか、何だか氣になつて堪らないんですよ」

心配さうに物語つた。

「それは何とも言へないわね、祖母様のためには現在の孫なり、姉様のためには、眞實の姪に當るのだけれど、揃ひも揃ふて意地の悪い人達ばかりなのに、彼の兒がまた人並優れて、年齢にも似合はず、物が能く分つてるから、屹度憎まれて、隈の方へ入つて小さくなつてるかも知れないよ」

「眞箇可愛相ですね、あのまゝ打棄つて置た日には、悪く氣が僻ひで、變な氣質になつて了ひますがね」

「私も然う思ふて心配爲てるんだけど、浮世の義理で何うする譯にも行かないから眞箇思案に盡てるのよ」

「恚う言ふ時に兄様が歸つて入來しやると非常に都合が可いんだけど、まだ往らして間がないんだから、然う言ふ理にも行かないし、眞箇思ふやうにならないもんですね」

失望の聲を漏す。

「彼の兒が薄倅に生れて來たんだから、何と思ふても止を得ないわ、矢張成行に任せらるより外は……」

照江も絶望の聲を放つた。

「雪子の事は止を得ないとして、如何でせう？ 姉様を離縁した事を、兄様の許へ通知爲たんでせうか」

「小母様からですか」

「はあ」

「そりや、無論通知爲たんでせうよ、容易ならぬ大事件ですもの……」

「若通知爲たとすれば、兄様は何う言ふ考へを持つて居らつしやるんでせう、小母様の仰やる事を、悉く信用なさるんでせうか」

「それは何とも言へないわ、第一小母様から何と言つてお遣りなすつたか、それさへ知れないんですもの……」

「何うせ良く言つて遣られる理はないですから、尾に尾を附けて悪様に言つて遣られ

たに違ひないでせうが、それを兄様に事實だとも思はれると、真箇忌々しい話ですわね」

「だから、事實を認めて送らうと思つただけども、父様が遣つてはならないとお止めなすつたので、其まゝ止て了ひましたけれど……事實と思はれるも、思はれないも、兄様の精神一つだから、此方でヤキモキ思つても爲方が無いわ」

諦めた如く言ふは言つたものゝ、哀恨の情は自から沈み切つた語調で察し得られる。國男は折角健康の恢復しかけた姉に、悲哀の情を起さしめたを太く悔いて、

「真箇爲方がありませんから、もう園村の話はふつつり止めて了ひませうね、それよりか、追々開校日が近づいて來ましたから、勉強爲なきやならないですが、明日から少し英語を教へて下さらないか」

巧に話頭を轉じた。照江もそれに釣込まれて、

「長く打棄つて居たから、忘れて居るかも知れないけれども、覺えて居たら教へて上げるわ、確かりーダの三だつたのね」

「は、然うですよ」

九十六

関が待に待つたお濱よりの書面は一ヶ月の後到着した。取手遅しと封を破つて、讀始めた関が眼は不安に輝くのであつた。

御無事御勤務被成候段、何よりの事と歡び居申候。私始め雪子も至つて壯健に暮居候へば御安心被下度候

却説今日電報をもつて御通知及び候、照江離縁の義に就いては、固より御前様の一生に繋る重大の事柄にも有之、殊に小兒も在る中に候へば、一應相談の上取計ふべき筋に候得共、行懸上相談する暇無之候ゆえ、專斷にて離縁決行致し候に付き左に離縁の事情申進せ候

豫てお前様より照江に渡し置候金子につき、不審の廉再三有之候得共、彼是言ふも氣の毒に思ひ、見て見ぬ態を装ひ居候處、ツイ四五日以前にも、又候小爲替を封入したる書面を郵便へ差出したるを見受け候ゆえ、何卒して證據を押へたる上にて、

支出の道を質し、萬一不都合の點あれば、懇々意見を加へ候意にて、密に注意を拂ひ居候處、今日所用ありて小林を訪ひ、夕暮近き頃歸宅致し候に、いつも出迎へ下れ候照江の姿が見えぬのみならず、國男の姿すら見えざるより、不審を抱きつゝ、密に照江の部屋を覗き候處若き男を室内へ引入れ、閉くに堪へざる醜談を囁き合ひ剩へ金子を與へ候を目撃致し候より、早速嚴重の追責致し候處一言半句の辯疏も致さず候故、止を得ず離縁を宣告致し候次第にて、目下國許へ照會中に付、迎への者上京候得者、荷物と共に引渡し候筈につき、左様御承知被下度、この後の消息は、第二信にて申上ぐべく候得共、取急ぎ離縁の顛末御通知申上候、時下這日暑氣相加はり候へば、御攝生專一に被成度候

母より

関 殿

讀了つた関は、今更のやう茫然として腕を拱又ひたまま考込むで居たが、やゝあつて「彌張推量の通りぢやつた……豈夫照江に限つてはと、心を許して居たのは私が誤り

ぢやつた。いくら小兒があつても、節操を二つにするやうな女は、離縁する外道はない……だが一體相手の男と言ふは何者であらうか……金子を與へる處を目撃したと記してあるが、此點から想像すると、決して上流の紳士でない事は知れて居るが或は俳優などと言ふ藝人ではあるまいか……」

と頻に想像を回して居たが、固より確然とした事の知れやう筈が無いので、「どうも確な想像が附かない……しかし、然う言ふ情夫が在つたとすれば、私が出發以前から在たのであらうか、赴仕の後であらうか……いや、出發以前には自惚か知らないが斷じて無かつた。して見ると、私が出發した後、空閑の淋しさに堪へかねて、不貞な心を起したのだらう、どうも然うとより思へない。いづれにしたところ、貞操を破るやうな女に未練はないが、親に別れた小兒が實に可愛想である」

言ひつゝ、靜に書面を巻きかけたが忽ち又たベリく引裂いて了つた。情にも脆いが、理性も明徹で、品性と名譽とを自重する関は、この書面を讀むと、

履の如く照江の事を断念した、卓上の時辰は今年午後六時を告げた。

九十七

歌子は其後日毎のやうに園村へ遊びに来てお濱の甘心を買ひ、雪子を馴附けやうと苦心するのであつたが、お濱は意の如く薬籠中の人となつて、隔意なく打ち解けて語り合ふまで親しくなつたが、雪子は如何に苦心するも、何故か親しまないので、當の歌子は固より、お濱、勝子の兩人も不審に思ふのであつた。けれども何を言ふにも頑是なき小兒の事であれば、追々には馴れ親むであらうと、さまで氣には留めなかつた。かゝる状態で早くも一二ヶ月は送つた。今日も歌子はお濱の好物である煉羊羹の折を持つて、午過から遊に来て、勝子の室へ集つて頻に演劇の噂なぞ始めて居る。

「私、團藏の光秀、餘り宜くつて、未だに眼の前に見えるやうですわ」

先づ歌子が賞讃すれば、お濱も同意して、

「日本一だと聞きましたね、眞筒上手でございますね、能くも七十以上の老體で、あれほどの藝が能たものだと、感心致しましてございます」

「眞筒上手ですわね」

「私團藏よりか、菊五郎の十次郎が宜かつたわ、綺麗だつたぢやありませんか」

勝子が批評する

「十次郎も宜かつたけども、少し肥り過てるので初菊が可愛さうでしたわ。私十次郎よりか高麗藏の正行が遙に宜かつたと思ひますわ」

歌子が言へばお濱が思ひ出したやう、

「左様々々、彼の正行では泣かされましたでございますよ。柏の前を勤めた役者も上手でございましたが、殊に正行を勤めた役者が宜しうございましたね」

「母様は歌舞伎座を始めて御覧になつたのだから、役者の事なぞ詳しい事は分らないでせうけども、柏の前を勤めたのが有名な芝翫で、正行を勤めたのが評判の高麗藏で、何方も名人同志ですもの、あれで泣けなかつたら、何處の芝居へ往つても泣けや爲ませんわ」

勝子が説明して聞せた。

「然うでせうとも、名前こそ知らないけども、藝の上手な事は能く分りますよ」

「では、這度は市村座へ御案内致しますわ市村座は歌舞伎の別れで、若手の腕達者はかりですから、なか／＼面白うございますよ」

歌子が言つた。

「左様でございますか、どうぞお供爲せて下さいまし」

かゝる談話の半へ、女中のお松が一通の郵便書を持つて来て、

「唯今参りましたでございます」

勝子へ渡して去つた。勝子を見るより驚き顔で、

「閑から寄来たんですよ」

お濱を見ながら言つた。

「おや然うですか、彼の事以來始めての書面だが、何と言つて来ましたか知ら、早く

讀んで見て下さい」

勝子は直に封を抜いて讀み始めた。歌子は他の書信を聞くべきでないと思つて、故と

立つて厠へ往つた。書面には如何なる事が記してあらうか、お濱は聞漏さじとやう、耳を澄して一膝進み寄つた。

九十八

七月十四日御投函の書面、本日到着拜見致候處、御無事留守居被下候由、有難く御禮申上候、私事も至極壯健に奉職罷在候間御安心可被下候

扱照江離縁の義に就いては、兩度電報にて御通知被下候得共、何分にも電文簡短にして、詳細の事情相知れ申さず、一向書面の到着を相待居り候處、漸く到着致し候に付、何も彼も委細了承仕候

實は照江に限り、女の道に背き候様の義は、斷じて有之間敷と確信致居候處、聞くも忌はしき不貞の御詳報に接し、誠に面目もなき次第に御座候、かゝる不貞の行為有之候上は、離縁被下候共、更に異存無之候に付茲に言明仕候

唯此上は親に別れたる雪子の御養育幾重にも宜敷御願ひ申上候
時下嚴暑の候に候得者、御自愛專一に願上候

小林氏へ別紙差出し不申候に付き宜敷御傳へ被下度候

母上様

英京にて

閑

閑の書面は右の如くであつた。讀了つた勝子はお濱に向つて、

「案じるより産むが安いと言ひますけれど眞箇ですわね。彼時の電報では甚麼不都合があつても、離縁は見合せるやうに言つて來ましたから、何か面倒臭い事でも言つて寄來さなきや可いがと、心配して居ましたけれど、書面を讀むですツかり斷念したと見えますわ、私もこれで辛と安心爲ましてよ」

「私もこれで重荷を下したやうに思ひますよ……其中には二度目に出した書面が着くでせうから、お前方が同居した事も知れやうし、荷物なぞ返した事も知れるから、安心するでせうよ」

語らひつつある折しも、歌子が入つて來た。見るより勝子は和り笑つて、

「お嬢様、御安心下さいまし、唯今閑の寄來した書面を讀んで見ましたら、照江の縁は無理からん事だから、決して異存はないと言つて寄來しましたんですよ。照江の事さへ斷念して下れますと、後の縁談を勧めるに誠に都合が好いんですから、唯今母とも歡んで話して居ましたんですよ」

「おやまあ然う……ですけれど可愛いお小兒さんがお在りなさいますとですから、定めて失望なさいましたでせうね」

「それは貴女、好むで結婚したほどですから、失望は爲たでせうけども、離縁した後まで未練残すやうな人ぢやありませんわ。ですから暫時経ましたらば、早く後を貰ふやうに勧めやうと思つてるのでございます」

言つて歌子を見て微笑した。歌子も微笑して何にも言はなかつた。ところへ午睡から覺めた雪子が入つて來て、眼を擦りながら勝子の傍へ行儀宜く座つた。其様子が如何にも無邪氣であつたから、一同思はず破顔一笑した。

「雪ちゃん、大層睡さうだが、彼方へ往つてお松に顔洗つて貰つて入來しやいよ、す

ると叔母様が宜い物上げるからね」

勝子が笑ひながら言つてるところへ、お松が入て来て、

「まあお嬢様、いっつお目撃遊ばしたんですか、一寸御用を達してる間に、姿が見えなくなりましたから、吃驚致しましてございますよ、さあお顔洗つて上げますから、早く入来しやいまし」

手を引いて室を去つた。

九十九

照江の健康が舊に復して、中等教員の受験準備をなし、國男が孜孜として中學に通ひ、関が英京に職務を勵み、小林夫妻が相川の髻の塵を拂ひ、歌子が希望の戀に慣れ、雪子が冷な養育を受け、お濱が無爲に留守居を爲つゝある中に、早くも其年は暮れ、翌年の春夏も過て秋の半となつた。

某日小林は官署から歸ると、洋服を着たまゝお濱と勝子を顧りみて、

「驚いたぢやないか、関さんが又外務省に歸る事になつたんですよ」

「え、ッ、関が歸りますつて？、誰から聞きなすつた？」

先づお濱が驚いて問ねた。

「誰にも聞いた理ぢやないですが、今日の官報に辭令が載つてゐるんですよ」

「おや然うですか、官報に載つてゐるのならそれより確な事はありませんが、まだ彼地へ赴つてから一年と九ヶ月ばかりしきやならないんですよ、何故然う早く呼返されたんでせうね」

勝子が不安さうに問ねた。

「何故轉任を命ぜられたのか、官省が異ふから其邊の消息は知れないけれど、官等が一等昇進して、這度は書記官を命ぜられたんだから、何か本省の必要上呼返されたに相違ないと思ふのだ、関君はなかなか若手の敏腕家と言ふ評判を博つてゐるんだからね」

「それでは、何方かと言ふと昇進した方で悪い方では無いんですね」

「無論悪い方ぢやないさ、殊に依つたらば政務局か、通商局かの課長にでも任命され

るんざやないかと思ふのだ」
 するとお濱が喜色を漂へて、

「まあ、昇進するのなら、これほど結構な事はありませんが、して何日頃歸つて來るでせうかね」

問ひかける。

「それは何うも私には分らないです。けれどもいづれ辭令は歸朝の後に受取るんでせうから、電報で呼返すのなら、遅くも來月の中旬までには歸らうと思ひますが、兩三日中には關君から何とか通知が在るだらうと思ひます」

「ごうか、早く知らせて下れると宜ござんすにね」

「那樣にお急ぎにならなくつても、來月一ばいには屹度歸つて來るぢやありませんか」

勝子が笑ひつゝ言ふ。

「急ぐ理ぢやないけども、歸ると極つた上は一日も早い方が宜いからね」

「歌子様がお聞なすつたらば、甚座にお歡びなさるでせう……もう、關の歸るのばかり、首を長くしてお待になつてゐるんですからね」

「無理もないわね、照江を離縁してから一年半にもなるんだから、それ以來伴の事を言通に爲て居らッしやるんだもの……歸つて來ましたらば、早々勸めて約束通りに爲て上げなくちや、眞箇お可愛相ですよ」

お濱が同情した辭を出す。小林は洋服を和服に替るため立つて次の室へ出た。勝手は其と知りつゝ、平氣な顔で話して居る。

「眞箇お可愛相ですから、歸つて來たらば早速貴母から勸めて下さいよ」

「それは言ふまでもない勸めもするが、もう再三書面で勸めて遣つたのだから、勸めなくつても承知するだらうと思ひますよ」

「承知してさへ下れれば、何を言ふ事ありませんわね」

百

「承知するも爲ないもあつたものぢやありませんよ、あゝ言ふ大きな小兒もあるし照

江ばと美しくは無いにしても、御繚致も宜ければ姿も宜し、其上一萬圓と言ふ持參金が在つて、親御だつて立派な官吏で居らつしやるんだもの……これ以上の後妻が捜したからつて、容易にあるもんぢやありませんよ。だから萬一不承知でも唱へやうものなら、私が親の威光でもつて、無理にも承知させますから、必ず心配するに及ばないんですよ」

お濱が得意氣に決心を語つた。

「私も大抵承知するであらうとは信じて居ますけれど、何時の返書にも、結婚の事は歸朝の節まで待つて下れいとばかり、認めて來ますから、何か又小難しい事でも言つて、承知爲なくは無いかと思つてそれで心配爲てるんですよ」

兩人が頻りに話して居るところへ女中が來て、

「相川のお嬢様が入來しやいまして、一寸奥様にお目に懸りたいと仰やいます」

「まあ、此方へお通し申せば可いぢやないか」

「はい、お通し申さうと存じまして、どうぞ御通り下さいましと申上げたんですけれど

も、些と此處でお目に懸つて、直に歸るんだと仰やいますんですよ」

「おや、然うなのかい、何用で入來したのか知ら……」

言ひつゝ、あたふたと玄關頭へ出た。見れば歌子は縞御召の袷に薄茶七珍の帯を締め和々して玄關口へ立つて居る。

「まあ、何故お上んなさらないんです、玄關頭なぞにお立ちなすつて……」

「だつて、急にお知らせ申したい事がありましたから、宅へ黙つて俵を飛ばして來たんですもの、上つてお話を爲て居られないですよ」

「大變お急なんですね、では失禮ですけれど此處までいもお上り下さいまし、此方で伺ひますわ」

「いゝえ、那樣大した事ぢやありませんから、此處で本の一口お話しすれば宜いんですよ」

「まあ、それでは生禮ぢやありませんか」

「何だつて管はない事よ、あの外な事ぢやありませんがね、園村さんが外務省の書記

官に御轉任なさる事か、今日の官報に出て居りましたから、餘り意外なものですか、一時も早くお知らせ申さうと思つて、それで駈けて來たんですわ」

「まあ御親切に故々有難う存じます。實は宅が先刻歸りまして、恁々だと其話を聞かして下れましたから、吃驚しながら、唯今其話を爲て居たところなんでございますよ」

「おや然うでしたか、それでは這處に慌てゝ上らなくても宜しかつたんですね、自分が嬉しくて堪らないもんですから、貴女方にもお歡ばせ申さうと思つて、夢中に飛出して上つたのですよ」

「どうも相済みませんでしたね……其代りには永々お待せ申しましたから、關が歸朝次第にね……宜いでせう」

和り笑つて言へば歌子も満足さうに、

「姉様私嬉しくて堪らない事よ……」
面差げに笑つて、やがて別を告げた。

西一

關は遂に十月二十日無事に歸朝した。お濱の歡喜は非常なものであつたが、それにも増して歡んだのは相川歌子であつた。關は歸宅早々外務省へ出頭して、無事に歸朝した旨を告げて、兩三日の慰勞休暇を得たのである。お濱や勝子は、右左から喋々と照江の事を、悪様に告げるのであつた。關は默然として聞いて居つたが、語り了ると共に、

「面目次第も無い理で、唯々呆れる外ありませんが、其後の様子は御存じないですか」

問ひ試みた。

「其後の様子は更り知れないけれど、屹度國へ歸つて家に居るか、それとも何所かへ再縁したかも知れないと思ひますよ」

お濱が答へた。

「弟は何うしたでせう？ 此方で矢張學校へ入つてゐるでせうか」

「然うです、ね、國男もあれツきり影も形も見ないから、或は一緒に連れて歸つたかも知れないわね」

「しかし、雪子に當分お困りなすつたでせうね……其事ばかり心配して居りました」
 「いや眞箇雪子には困りましたよ、あれが普通の小兒ならば、まだ四歳やそこらですから、欺しも利けば、透す事も出来るんだけども、人並外れて伶俐者と來てるから何と言ひ聞かしても承知爲ないで、唯もう母様々と、朝に晩に泣かれるので、こればかりには、私も勝子も弱らせられて了ひました。或時なぞは、書生部屋で順しく遊んでると思つて覗いて見ると、何うして持つて居たもんだか、照江の寫眞を手持つて、熟と眺めて泣いてるんだよ。然う言ふ始末で、當分は實に何うも機嫌取るのに、往生爲ましたけれど、お松をお守に頼むでからは、一日一日と泣くのが少くなつて、近頃では何うやら忘れた様子で、母様とは言はなくなりましたけれど、何分にも餘り智慧が進み過てるものですから、何を言つて聞かせても、得心が行かなさきや容易にハイと言はないから、誠にどうも始末に了へないんですよ」

「それは、とんだ御厄介掛けてお氣の毒でしたね。私もどうせ那樣事であらうと、初中終心配して居たのです」

「まだ歸つて來てから雪子を見ないのぢやないかね」

「いえ、歸つた時に玄關先で一寸見ましたが、忘れて了つたと見えて、變な顔して遁げて了ひました」

「まあ然うかな、どうだね、全で見異へるほど大きく成つてるでせう、着物の丈が三寸違つて來ましたもの……」

「へえ、那樣に大きくなりましたかね」

「するとお濱は勝子に向ひ、」

「お前些と連れて來て御覽よ、忘れて居ても眞實の親だもの……直に馴れるに極つてますよ」

「内に居ますか知ら……」

言ひつゝ室を出たが、やがて華美な矢絰銘仙の袷に、純白の胸掛前を掛けた、花の如

く愛らしい雪子（ゆきこ）を連れて来た。するとお濱（はま）は例（れい）にない優しい聲（こゑ）を出して、

「雪（ゆき）ちゃんや、お前（まへ）お父（とう）様（さま）が歸（かへ）つて入（い）來（ら）したのに、御（ご）挨拶（あいさつ）爲（な）しましたか、え、ッ……
此（こ）處（こ）に居（い）らッしやるのが、お前（まへ）さんのお父（とう）様（さま）ですよ、能（よ）く抱（だ）いて歩（あ）いて頂（いた）だの
を、もう忘（わす）れて了（し）つたんですか、え、ッ、一（い）度（ど）久（ひさ）し振（ぶ）に父（とう）様（さま）のお傍（そば）へ往（い）つて御（ご）覽（らん）な
さい」

百二

閑（たひし）は長途（ちやうと）の疲（ひ）勞（らう）も、最（さい）愛（あい）の妻（つま）であつた照（てる）江（え）の事（こと）も、總（すべ）ての不（ふ）快（かい）の念（ねん）を打（うち）忘（わす）れたやう、
常（つね）には威（い）嚴（げん）を保（たも）つたために、容（よう）易（い）に笑（わら）はない顔（かほ）に崩（くづ）れんばかり笑（あは）を浮（うか）べて、

「お前（まへ）父（とう）様（さま）を忘（わす）れつ了（し）つたね……さあ久（ひさ）し振（ぶ）に抱（だ）こして遣（や）るから、早（はや）く此（こ）處（こ）へお出（い）
で……」

優（やさ）しく辭（ことば）をかけた。雪（ゆき）子は微（ひ）笑（せう）を含（く）むだまま勝（かつ）子（こ）の傍（そば）に座（す）つて、抱（だ）かれて見（み）たくもあ
り、羞（はづ）かしくもあると言（い）つたやうな風（ふう）情（じやう）を示（し）す。

「どうしたんです、父（とう）様（さま）が抱（だ）こして遣（や）ると仰（おつ）しやるぢやありませんか、早（はや）く往（い）らつしや

いよ

勝（かつ）子（こ）が勸（すす）めた。有（あ）繫（け）に父（おや）子（こ）の情（じやう）は格（かく）別（べつ）なもので、心（こゝろ）なき幼（こゝろ）兒（ご）でも感（かん）應（おう）的（てき）に、知（ち）得（とく）する
事（こと）が能（でき）るのか、歌（うた）子（こ）の如（ごと）く其（その）甘（あま）心（しん）を買（か）はつたために、種（しゆ）々（々）の物（ぶつ）品（ひん）を與（あた）へて親（おや）まんとする
熱（ねつ）心（しん）家（か）にすら、未（いま）だに親（おや）まない雪（ゆき）子（こ）が、羞（はづ）かみながらも自（みづか）かた立（た）つて閑（たひし）の傍（そば）に近（ちか）じた。

「お、來（き）たか、來（き）たか」

言（い）ひつゝ手（て）を伸（の）びて膝（ひざ）に抱（だ）き上（あ）げた。雪（ゆき）子は唯（ただ）閑（たひし）の爲（ため）すが儘（まま）に任（まか）せて居（い）る。

「大（たい）層（そう）大（たい）きくつたね、父（とう）様（さま）の留（る）守（しゆう）中（ちゆう）は祖（おば）母（はは）様（さま）や叔（おじ）母（はは）様（さま）と、順（おとな）しく遊（あそ）んで居（い）たでせう
ね……え、これからも順（おとな）しく遊（あそ）ぶのですよ、其（その）代（か）り父（とう）様（さま）は、お前（まへ）に澤（たく）山（さん）お土（ち）産（さん）を
買（か）つて來（き）て遣（や）りましたから、どれどれ出（だ）して上（あ）げやうね。チヨイと待（ま）つて居（い）らつしや

いよ

雪（ゆき）子（こ）を膝（ひざ）から下（くだ）して、壁（かべ）際（ぎわ）に列（なら）べて在（あ）る幾（いく）箇（つ）かの行（こう）李（り）の中（なか）から、一（い）箇（つ）の大（おほ）砲（ぱう）を取（と）り出（だ）し
て、其（その）中（なか）から、大（おほ）きな西（せい）洋（やう）人（にん）形（ぎやう）を始（はじめ）、玩（あそ）具（ぐ）の樂（がく）器（き）や、器（き）械（がい）仕（じ）掛（かけ）の猫（ねこ）や犬（いぬ）や、室（むろ）内（ない）を
飛（と）び廻（まわ）る理（り）學（がく）的（てき）の鳩（たむらこ）や、其（その）外（ほか）雪（ゆき）子（こ）のた（た）めに特（とく）に調（てい）へた、洋（やう）服（ふく）、帽（ぼう）子（こ）、靴（くつ）なぞ、所（ところ）狭（せま）きま

で列べられた、雪子は最早羞含む様子もなく、和々として眺めて居る。

「どうだ、這麼に澤山お土産を買つて来て遣つたが、これぢや順しく爲なきやならな
いでせう、え」

笑ひながら雪子を見る。

「順ちく爲ますから、どうぞ頂戴……」

馴々しく口を利く。

「諾々、順しく爲るなら皆な與るよ」

言ひつゝ自ら犬や猫の鍵を巻いて放ち遣ると、犬も猫も室内を歩き出す。雪子は歡んで手を拍ちながら、

「叔母様、御覽なちやい、歩きまつ、歩きまつ」

「まあ宜い玩具を買ひましたね、壞さないやうに大切に爲るのですよ」

お濱は、かゝる精巧の玩具は餘り實見した事がないために感心して眺めて居たが、
「全で生てるやうだね、日本でも買つてますか知ら」

勝子に問ふた。

「日本にでも有る事はいくらでも有りますけれど、這麼大きなのは何うですか知ら……
…捜したらば有かも知らないですが、馬鹿々々しく高い事言ふでせうよ」

「然うでせうね、餘り珍らしいから、國へ歸る節に敏郎(長男の子)に買つて歸つて遣
りたいと思ふのだよ」

すると関が、

「敏郎にも買つて来て遣りましたから、小包にして送つて遣らうと思ふのです」

「まあ、能く氣が注いたね、それは甚麼に歡ぶ事だか知れませんかよ、なかに小包でな
くても、私の歸る節で澤山ですよ」

百三

関は鳩の體内に仕掛てある螺旋を巻きつゝ、

「だつて、何時お歸りなさるか分りも爲ないに、それよりか早く送つて遣つた方が宜
いぢやありませんか」

言つて、手にした鳩を軽く上に投げると、宛も生ける鳩の飛ぶが如く兩翼を擴げて天井に達するまで高く上つた。雪子は夢中になつてキャツ／＼と歡んで居る。お濱も勝子も其巧妙に驚いて見上げて居た。が、やがてお濱はやゝ姿を正して、

「歸つた勿々、這麼話をするのも何だけでも、實はお糸(長男の妻)が來月産をするのでね、手が少ないものだから、此方の都合が附く事ならば、又た上京するとも一先歸つて貰ひたいと、此間から二度も手紙を寄來したから、幸にお前が歸る事になつたから、歸朝次第に歸つて往くやうに、返書を出して置いたんですよ。だから私はお前が歸つた上は、成たけ早く歸つて往かうと思ふのですよ」

「そりや困りましたね、當分は同居でも管はないですが、いつまでも同居爲てる理には行かないですから、早晚別居爲なきやならないのに、貴母がお居で下さらなくツちや、雪子に困りますからね、國の方を何うかして頂いて、今暫時く滞在して下さらなくちや困りますよ」

「ところが、それが然う言ふ理に行かないんですよ、歸ると言つて遣りましたから、すツかり私を當に爲て居ますからね」

「だつて、それぢや此方も困るぢやありませんか。何うにかお歸りにならなくても濟むやうな事にはならないでせうかね」

「敏郎を産むだ時に、産婆が間に合はなくツて、私が産まして遣つたから、私が居なくちや、心細くて産めないんかも知れないのですよ、ですから又上京するとも産の時だけは歸つて遣らないと可愛さうですからね」

「それは困りましたね、何うしたら宜いか知ら……」

屈托して考へ込む。それを見て取つたお濱は好機逸すべからずとして、

「それに就いてお前に相談爲たいと思ふのは、再度書面を遣つた縁談の事だがね、どうせ貰はなくちやならないのだから、少々な不足はあるとしても、此方にも雪子と言ふ邪魔者が居るのだから、我慢して此際貰つて了つては何うですな、私も飯るには飯るものゝ、お前の事が案じられてならないんだから、此方に居る中に貰つて了

つて下れると、安心して歸つて往かれますからね……歌子様の事は、私が言はな
くつても、お前も能く知つて居るでせうけれど、嫵致だつて悪くはなし、上品で柔和
で、學問もあれば遊藝にも達して居らつしやるさうだし……其上一萬圓と言ふ持
參金を附けると仰やるのに、お前の留守中は毎日のやうにお遊に入來して、雪子も
可愛がつて下されば、私にも親切にして下さつて、氣心を見抜いたからこそ、慙う
し、勧めるんですから、小兒のためだと思ふて、どうか貰ふと言ふ事に極めて下さ
いよ、眞箇彼の方なれば家のためになりますよ」

辭を盡して勧めるのである。

百四

閑は母の勸告を沈黙して聞いて居つたが、語り了つた後も、容易に口を開かず、やゝ
暫く思案した後、

「實は雪子を繼母の手に懸けるのは、如何にも不便だと思ひまして、此兒の物心の注
くまでは、貴母に居て頂く事にして、暫く妻は貰はない考へて居たのですが、今日

本省へ出頭して見ると、政務局の一課長に任命される事になりましたから、到底嫌
様達と同居して居る理に行かなくなつたのです、何故かと言へば、樞要の事務を主管
する事になつたから、種々雑多の人と交際爲ますので、訪ねて來る人も随つて多く
ならうと思ふです。だから近々此宅は姉様達へ譲つて了つて、私は成だけ外務省へ
近い所へ轉宅爲やうと思つて居るのですが、それを決行するには、何うしても内を
取締つて下れる人がなくちゃ、逆も召使に任せて置く理には行かないです。

就いては、お氣の毒でも貴母に居て頂いて、内の取締と雪子の養育をお願ひ爲たい
と、すつかり的に爲て居たんですが、然う言ふ事情で歸國なさらなきやならないと
すれば、不本意ながらも決心を翻して、内の取締を爲せる者を貰はなきやならない
ですが、しかし相川の歌子さんは近來は何うか知らないですが、私が時々遊に行く
頃は、大層我任意で、お轉婆娘であつたやうに思ひますが、私の妻として面目を失
ふやうな事は無いでせうか、若貰ふとすれば貴女方の辭を信じて貰ふのですから、
其邊の點を能く見極めて下さらなくちゃ困るです」

と答へた。今まで兩人の談話を聞いて居た勝子は茲ぞ浮沈の分るゝ所とお濱の辭を待たずして、

「何うして、お前さんが遊に上つた頃の歌子さんと、今日の歌子さんとは、殆ど別な人かと思はれるほどですよ。私は近頃でも、時々伺ひもすれば、お嬢様も能く入來しやるから、お互に缺點は目に着くものですが、母様の仰やる通り、眞箇上品な順しい宜いお嬢様ですよ。お前さんの面目に關るやうな事は、必ずありませんから貰ふ事にお極めなさいよ」

勸めた。

「それほど貴女がお勧めなさるんならば、貰ふ事に決心爲ますから宜からうやうに取計らつて下さい」

「能く承知して下れました。然う決心が附いた上は、總ての相談は私共で取計ひますから、何にも心配するには及びませんよ」

「それでは、成だけ早い方が宜ござんすから、私は何彼の相談に、相川様へ往つて來

勝子が言ひ出した。

「然うだね、種々御都合がお在んなさるでせうから、一度お話に往つて來て貰ひませうね」

「では暫くお留守を願ひますよ」

勝子は匆々相川家へ往つた。

百五

歌子は己が室の机に對して、書面を讀んで居たが、讀了ると共に、チヨツと舌打をし

「何うして男ツて這度に執固いだらうね、一昨日會つた時に、もう暫く會はれないから、必ず書面なぞ寄來して下さつちや困ると、あれほど能く頼むで別れたのに、三日と經たない間に、又會ひたいから首尾して出て下れたと……何うして那樣に出られるものかね。真逆々々しい。

それは然うと、今日は閑さんが歸朝なさる筈だが、もうお歸りなすつたか知ら……
定めてハイカラな美男子にお成りなすつたであらうね……何うかして一度お目に懸
れないか知ら……」

茫然と空想に耽けて居たが、やがて急に紙を取出して、

御文拜見いたし候へども、一昨日懇々申上候通り、此處暫くは逆も外出難かしく候
まゝ、左様悪からず思召下され度首尾克節は私よりお知らせ申上げ候へば、それ
までは必ず御待受け下され度、先は御返事まで申上候

御存より

柳下様

さらくと認め了つた。これは言ふまでもなく、情夫柳下卓次郎の來書に對する返書
であるのだ。讀返しもせず、其まゝ封套に入れて宛名を認めつゝあるところへ女中が
襖を掛けて、

「お讓儀、小林の奥様が入來しやいまして一寸お目に懸りたいと仰やいましてござい

ます」

「然う、差支へ無いから、此方へお連れ申して下さい」

「はい」

と退つたか、やがて勝子を案内して來た。

「何うして改つて執次なんかお使ひなすつて？いつもすん／＼入來しやる癖に……」
怨みがましく言つて微笑した。

「真箇でしたことね、ツイ迂濶して執次を頼むたのですよ」

同じやうに微笑した。

「何うかしていraftしやるんだわ」

「真箇然うなんですよ、途中から種々な事を考へながら上つたものですからね、少し
茫乎爲てたんですよ」

「それは宜いとして、姉様閑様はまだお着なさらなくつて？」

問ひかけた。

「いゝえ、十一時に新橋へ着まきして、直に外務省へ顔出をして、唯今宅に休むで居るんですよ」

「然う、それはお目出度う存じますお母様がお歡びなすつたでせうね」

「は、有難う存じます、あゝ言ふお人良ですから、顔を見るとほろ／＼と嬉し涙を零すんですよ」

「無理はありませんわね、何千里外からお歸りなすつたんですものね……しかし、世界第一の大都會で、交際界に立つて居らしたんですから、定めてハイカラになつてお歸りなすつたでせうね」

「英國風とでも言ふのですか、以前から見ますと、何處か氣が利いて品が宜くなつたやうに思はれますけれど、以前から氣障なハイカラは大嫌でしたから、想像して居たほどぢやないんですよ」

「私六年もお目に懸らないから、一度早く姿が見たいと思つてるんですよ」

百六

勝子は笑ひながら

「其様にして、御覽なさらなくても、やがて見飽くほど見られるぢやありませんか？ 意ありげに言つて顔を見た。」

「だつてそれは當になりませんわ 可厭だと仰やればそれきりですもの……」

「可厭も可厭でもないも、もう相談は決定して了つたんですよ」

「えゝツ、それは姉様御笑談でせう……」

「いゝえ、眞箇の事なんです、實は意外に早く話が纏つたものですから、貴女にもお話申したり、奥様へも改めてお話申上げやうと存じまして、急でお伺ひ申したんですよ」

「まあ、姉様眞箇の事ですか、私何だか夢見たいな心が爲ますわ」

「眞箇這麼に早く纏うとは夢にも思つて居なかつたのですが、丁度宜い話の序があつたものですから、其幸と母が勧めましたところが、宜い鹽梅に諾と承知致しました」

「んですよ。これで私も漸くお約束が果せる事になりました。眞箇胸の悶が取れたやうな心が致しますわ」

愉快さうに言つた。

「いろ／＼と無理な事をお願い爲て相済みませんでしたが、どうか姉様勘忍して下さいませよ、御恩は決して忘れは致しませんからね」

赤心から嬉しさうに禮を述べた。

「可厭ですよお禮なぞ仰やつては、私も無理なお願ひして協へて頂いたんですもの、お互ちやありませんか、それに就きましてお相談申したいのは、母が急に國許へ歸らなきやならない事が出来致しましたので、母の此方に居る中に、式を済して丁ひたいと存じますから、甚だ勝手な事を申して相済まないですけれど、願へるものならば、然う言ふ都合に願ひたいと存じまして、其事を御相談に上つたのですよ」

「私は何時でも宜いんですから、どうぞ失禮ですけれども姉様から母にお話しますつて下さいませんか」

「は、何うせお目に懸らなきやならないんですから、お目に懸つて御相談申上げますわ」

「どうぞお願ひ申しますわ」

「では、些と失禮致しますわ」

勝子は會釋して室を出たが、直に夫人町子の室を訪ふた。而して関が歸朝した事、歌子と結婚を承諾した事など、詳しく物語つて、

「それに就きまして、御相談申し上げたいのは、甚だ勝手なお願ひでございますけれども母が餘儀ない事情が出来致しまして急に國へ歸る事になりましたので、其以前に式を挙げたいと申しますから、此方様の御都合が宜しうございますならば、どうか然う言ふ事にお願ひ申したいと存じまして、其お願ひ伺つたのでございますが如何なものでございますか」

と相談に及んだ。

「おやまあ、今日お歸りなさるとは聞いて居りましたが、それはまあ御無事に御歸朝

なすつて何よりでございしましたね、然う言ふ御都合がお在んなさるなれば、私の方は大抵な準備は整つて居りますから、貴方の方の御都合次第で何時でも厭はないんですよ」

「ごうも御無理をお願ひして相済みませんけれど、どうか宜しくお願ひ申し上げます。左様なれば何時と定めて宜じうございせうか」

「では恚うして下さいな、宅と相談爲まして、吉日を撰むで此方から申上げる事に……」

「では、どうか然う言ふ事にお願ひ申し上げます」

百七

一生を獨身で送らうと決心した照江は、中等教員の検定を受けやうと、非常に勉強した結果、優秀の成績を以つて合格したので遂に麴町の東京女學館へ國語擔任の教授に招聘されて、熱心に教鞭を執つて居つたが、検定を受ける準備に過度の勉強したのと其未だ園村家に在るの日、姑のために苦められたとの二者が原因となつて、勤務に堪

へられぬほどの病氣に罹つたので、早速名ある醫士の診察を受けると、心臓を犯されて居るとの事で、暫時勤務を廢めて、静養爲なければ、恢復する事にならない重患に陥るかも知られぬと言ふ忠告を與へられたので、斷然女學館を辭して、一向療養する身とはなつたのである。某日の午前十時頃であつた。朝未明から一點の雲も無い晴明の天氣で、病める身にも何となく爽快を覺えしむるので、自ら藥餌と診察を受けやうと、静に歩みつゝ麴町平河町なる佐藤醫學士の宅に往つて、一時間の後歸途に就いた。色こそやゝ青白く見えるが、軀にさしたる衰弱も見えず、粹に過はせぬかと思はるゝ縦格子になつた、御納戸地の御召縮緬の袷に消墨縮緬の羽織を被て、白足袋の足に縹珍表の空氣草履を穿ち、髪は束髪に空色のリボンを飾つて、手に白絹に包むた藥瓶を持つて居る態は、誠や花の露に惱むが如く見ゆるのである。三年町のなだれ坂まで歸つて坂の半途まで下つた時、出合頭に、

「おい照江」

突如に聲を掛けた人がある。照江は吃驚して顔を上げたが、見れば叔父の廣澤八郎が

真新しい脊廣服を着て、鼠色の中折帽を被り、手に美事なステッキを携へて立つて居るから、覺えず、

「おやツ……」
と立留つた。

「まあ好い都合に出會つた者だ。私はお前に會ひたいと思ふて、紀尾井町の家へ訪ねて往つたところが、照江は國へ歸して了つて、東京には居ないと言はれたので、何時歸つて來ませうかと問ねると、此方からは不都合があつて離縁して了つたから、歸つては來ないと言ふ挨拶なんだ、吃驚して早々歸つて來たが、何う言ふ不都合があつて離縁されたであらうかと、非常に心配爲たけれども、國へ歸つたと聞いたので聞いて遣る理にも行かないし、心配しながら、其まゝに打過て居つたが、一體何時東京へ出て來たんだ」

問ひかけた。照江は八郎に金を借に來られたのが動機となつて、遂に破鏡の悲嘆を見るに至つたので、普通の人なれば怨みに思ふのが常情であるのに、半生を轆轤不遇に

送つて、親兄弟から絶縁された叔父の不幸に多大の同情を寄せて居るから敢て怨む様子もなく、

「私、國から父様が迎に來て下すつたんですけれど、面目無くて歸る氣になれないのに、東京で少し目的があつたものですから到頭國へは歸らなかつたんですわ」

「ふむ、然うか、私は又國へ歸つた事とのみ思つて居つたが、東京に居たのか……して離縁されたと言ふは、一體何う言ふ理由なんだ」

百八

叔父の八郎から離縁の理由を問ねられた照江は、些と答に躊躇したが、さりとして事實を捏造して話す事もならないから、氣の毒とは思ひながら、八郎が金子を借に來た、めに、あらぬ濡衣を被せられて、それが離縁の原因となつた事を詳しく物語つて、

「尤も貴方の事ばかりでなく、其以前から姑の機嫌は宜くなかつたのですが、其所へ丁度姑の留守に貴方が入來して、金子を差上げて居たところへ、折悪しく歸つて入來したものですから、得たり賢しと難題を言ひかけられたんですが、固より現在叔

父の貴方が入來したので、怪しまれる道理は微塵も無いんですから、始は成だけ言はない意で居ましたけれど、離縁すると言ひ出されたものですから、止を得ず、斯様々々と貴方の事を打明けて了ひましたけれど、何と言つても聽容れないで、表面は姑の不在中に、怪しい男を引入れて、金子なぞ遣つたと言ふのが口實となつて、到頭離縁されて了つたのでございます。

それに就いては父様も姑へ對して、貴方の事を十分に辯解して下すつたのですけれど、元來が氣に入らない私だものですから、何の効も無かつたのですよ」

語り了つて其當時を思ひ出して悄然とする。八郎も非常に驚いて、

「いや、然う云ふ事が原因となつて離縁されたなぞとは夢にも思つて居なかつたが、實に驚き入つた話だね……しかし他に何う言ふ事情が在つたにしても、離縁の理由が私が往つたのが原因であつて見れば、何と挨拶して宜いか、挨拶の爲やうもないが、どうかまあ腹も立つたらうけれど堪忍して下れい、那樣事になると知つたらばいかに困つたからとて、訪ねて行くのぢやなかつたに、實に氣の毒な事を爲たね。

定めて兄様が怒つて居たりらうね」

「いゝえ、事柄が餘り莫迦々々しい事柄ですから、那樣に怒つては居らツしやらなかつたんですよ」

「だけれども、いくら嫁姑の間だからツて眞實の叔父が訪ねて往つたのを、怪しむ奴も無いものだ、餘ほど理の分らない姑と見えるね」

「性質は悪くは無いですけれど、随分無理を仰やる方なんですすよ」

「して、今は何處に何を爲てるのだ」

「父様に願つて、國男の監督爲ながら、少し勉強して女學校の教員にでもなつて、一生獨身で送る決心爲まして、赤坂の靈南坂町へ家を借て頂いて、唯今は其處に居るんでございますが、加減が悪いものですからお醫者様に通つて居るんですよ」

「靈南坂町に……然うか、して病氣は何病氣なんだ、道理で顔色が悪いと思つたよ」

「心臓が悪いんださうですわ」

「心臓？それは大變だ、何うして那樣病氣に罹つたのかね、大切に養生爲ないと不可

「はい」

「まだ、太くは無いださうですから、養生さへすれば大丈夫ですわ」

「私も、親兄弟には見放される、お前にまで度々厄介を掛けたから、一奮發爲なきやならないと思ふて、種々苦心爲て居る最中へ、某人から鑛山を遣つて見ないかと言つて勧められたから、少しばかりの金子を出して貰つて、他の見捨てた鑛山に手をつけて見たところが、運が向いて居つたと見えて、其山から大層金が出たので今日では何うにか紳士の仲間入が能うに成つて来たから、お前に借た金子を返したり、歡んで貰はうと思つて訪ねたんだが、今言ふ通り國へ歸つたと聞いて、非常に残念に思つて居たところだ、立断も能ないから、いづれ一兩日の中に訪ねるが番地は何番だね」

「十五番地ですよ」

「然うか、それぢや今日はこれで別れる、大切に養生するが可いよ」

「はい、有難うございます」

坂を上下に別れた。

百九

関は遂に母と姉とに勧められて、相川謹三の娘歌子と結婚の式を挙げた。結婚が済むと、三日目の朝、お濱は新橋停車場から馬關行の直通列車に乗つて歸國して了つた。

丁度其日は日曜日であつたから、停車場へ母を見送りに来た関は、妻の歌子に向ひ、

「私は、これから家を探して歸つて行くから、お前は姉様と御一緒に、雪子を連れて歸つて行くが宜い」と言付けた。

「はい、何時頃お歸りなさいですか」

「然うさね、適當の家が見附りさへすれば、直に歸るが、見附らなかつたらば、少し遅くなるかも知れないが、右に角正午までには歸つて往くから、誰か訪ねて来た人があつたら、然う言つて置が可い」

「はい、承知致しました」

「姉様、私は此處から失敬爲ますよ」
勝子に挨拶した。

「然う、成たけ早く歸つて居らつしやいね」

言ひ棄て、停車場を急ぎ足に出た。勝子と歌子は徐々と雪子の手を引いて入口まで出て、其處から待せてあつた俥に乗つて歸つて往つた。歸ると歌子は勝子に對ひ、

「姉様、別に家をお借にならなくつても、憚うして御一緒に居る方が、賑で宜いと思ひますが、何うして別居なさるんでせうね」

問ねた。

「それは、歸朝した時から然う言つてたのですが、歸朝早々非常に多忙だつたものですから、婚禮だけ此處で済して、それからにするが宜いと、今日まで延してあつたのですよ。別に理由は無いのでせうけれど、交際が廣いものですから、多方面の人が訪ねて入來しやるので、もつと廣い立派な家が欲しいのでせうよ」
微笑して答へた。

「別居なさるんなれば、成たけ此方へも實家へも近い場所に爲たいもんですわね」

「眞箇然うですね……事に依つたら然う言ふ都合の好い場所にあるかも知れませんが、近頃は不景氣だと言ふので、大層空家が多いさうですからね……」

「ですけど、成たけ官省へ近い場所へ借たいと言つてらしたんですよ」

「だつて、電車で往けば此邊が丁度宜い加減な場所ですわね」

「然うですとも、以前だつて此處から通つて居らしたんですもの……此邊だと都合が宜いんですがね」

と、移轉の事、移轉後の事など、色々と言ひ合つて居る處へ、所用のために早朝から外出した小林が歸つて來た。勝子は直に良人の室へ往つた。歌子は爲すべき用向ととも無いから、己が室に入つて新聞を読み始めて居ると、十一時を打つた時闌が歸つて來た、媢に迎へて共に室へ入つたが、淑に、

「如何てございましたか、理想の家が見附りましてございますか」と問ひ試みた。

「家は澤山に見附つたが、何の家に爲やうかと、今思案して居るのだ」

「まあ、那様に澤山在るのですか、何の邊か存じませぬけれど、成だけ此方へ近い場所にお極めなさいましたな」

「遊に來るに便利だからね」

微笑する。

「あら、然うぢやありませんわ」

百十

照江は氣分が勝れぬために、六疊の室へ床を敷べて横になつて居ると、今しも中學から歸つて來た國男は、顔色を變へて入つて來た、

「姉様、驚きましたね、三軒目の大きな家ね……昨日まで貸家になつて居た……彼の家へ園村の家が引越して來たんですよ」

呆れたやうに言つた、この辭には病氣の照江も、俄破と床の上に起き直つて、

「え、ッ園村が越して來ましたッて……何うして分つたの？」

眼を睜つて問ひ返した。

「だつて門の柱に園村と書た、新しい大きな標札が懸けてあるんですよ……」

「へえ、園村と書た標札が出てあるなら、然うかも知れないが、それでは園さんが歸られたんでせうかね」

「どうも僕は兄様が歸つて居らしたんだと思ふです。それでなくちや、那麼立派な家へ移轉する必要が無いぢやありませんか」

「それも然うですわね……無論私共が此處に居る事は知らないで轉宅爲たんでせうけども……困つた所へ引越されたもんですわね」

心配さうに言ふ。

「近所同士ですから、いくら注意して居ても、いつか見附かるに極つて居ますが、何うしたもんでせうね、今の中に何處かへ轉宅してしまはせうか」

姉の心中を察して恁う言つた。照江は沈と考へて居つたが、

「轉宅すると言つても、家を捜さなきやならないし、設令在つたにしても、道塵閑靜

な場所は少ないし、迎もこれほどの家を今のやうに安く貸す所はないと思ひますから、越すにしても、能く搜した上に爲なきや徒目ですが、私の考へでは、何も離縁されるほどの悪い事を爲た覺は、少しも無いんですから、園村が引越して来たゝめに、面目無くて逃げ出したと思はれるも残念だから、知らない顔して、沈と此處に居た方が可いと思ふのよ」

決心を語つた。

「姉様が其氣で居らツしやるんなら、それは結構ですが、僕は又兄様の顔を見たり、雪子の顔を見たりなると、色々な感が起つて、ために一層御病氣に障はるやうな事があつてはと、それを心配爲たのですよ」

「なあに、もう諦めてるから、設令顔を見たからつて、何とも思はない意だけれど、それでも顔を見れば宜い氣地は爲ないから、私成たけ外へ出ないやうにして、顔を會はさないやうにするわ。お前も成たけ注意して顔を見られないやうにして下さいよ」

「僕も學校へ行くと返るとの外は、成たけ外出爲ないやうに爲ますが、唯困る事には庭 出ると、彼家の二階から見えますから、これまでのやうに、庭へ出る理に行かなくなつたんですよ」

「眞箇だわね、これからは追々寒くなるんだから、庭へ出る必要も少なくなるけれど夏の夕方困るわね」

「何にしても可厭な所へ越て来たもんですね……………」

「眞箇可厭だわね…………お前表の門に打附けてある標札ね、あれを外して入口へ打つて置いて下さいよ」

百十一

「然うですね、仙波と書てあるばかりですが、それでも氣注かれると可厭ですから、早速打替て置ませう」

答へて、國男は直に戸外へ出たが、やがて又入て来て、

「入口へ打つて置ましたから、あれなら分る氣遣ひありません」

「然う、それは御苦勞様……入口へ打直して置けば、門の外からは大丈夫見えないわね」

「大丈夫ですとも、僕門の外に立つて眺めて見ましたが、他家の標札と違つて、文字が小さいのですから、何と記であるか、些とも分らないんですよ」

「然う、それは大丈夫だわね」

「標札は大丈夫ですが、それよりか、僕は學校へ往復の節に、ひよつと兄様に見られなきや可いが、それを心配するんですよ」

「然うね、必然外務省へお歸りなすつたに相違ないと思ふから、外務省だと、學校へ往くの、丁度道筋が一緒になるわね……」

窮つた顔色で言つたが、やがて又、

「だけれども、お前が注意して居れば、大丈夫顔を合せるやうな事はあるまいと思ふけれど、萬が一止を得なくて、顔を合せる事があるにしても、お前さへ知らない顔して居れば、園村の方から辭をかけるやうな事ないと思ふわ」

「然うでせうかね、ぢや成たけまあ、顔を見られないやうに注意爲ますが、しかし不思議な事があるもんですね、この廣い東京の中で、場所も有らうに、お隣家へ越して來るなんて、何う考へても不思議ですわね」

「眞箇不思議だわね、だが國男さん、小林の札は懸つて居なくつて？」

「いえ、小林の標札は出して無いんですよ」

「然うだらうね、園村が不在だつた爲に、同居爲たんだからね、歸つた後まで同居する必要無いわね」

「しかし、二人や三人の家族で、那麼大きな家を借る必要有るまいと思ひますがね……」

「でも屹度又昇進なすつたんでせうから、餘り小さい家では、交際上に差支へるのかも知れないわ」

「それも然うですわね、如何でせう、小母様まだ滞在爲てるんでせうか」

「爲てらッしやるんでせうよ、それでなくちや雪子の世話を爲る人がないぢやありませんか」

せんか」

「然うですね……雪子の世話をするばかりでなく、兄様が出勤なすつた後で、家の取締を爲る人がありませんからね」

「然うですとも、だから滞在して居らつしやるに極つて居ますよ」

かゝる談話の中に、秋の日の短く、いつしか時計の針が五時に垂々として居るので國男は吃驚爲たやう眼を睜つて。

「おやツ、もう日か暮れるんですね、五時ですよ」

あたふた己が室へ去つた、後で照江は何處を見るときもなく、空を凝乎と瞶めて居たが、思ひ餘つたやう、太息を洩して。

「折角忘れて居たものを、傍へ越して来るなんて、本當に爲様が無いね、いくら注意して居たからツて、長い月日には、何うして顔を合せないとも言へないが、困つた

事が出来たね……」

心に思ひつゝ、尙も眼は空を瞶めて居る。

百十二

園村が隣家へ越て來たに就いては、照江が病軀に少なからぬ痛撃を加へて、其夜は碌々眠る事も能なかつたが拂曉の頃、疲勞の結果昏々と眠るともなく眠むと、室の襖を靜に排けたやうに覺えたので、ハツと眼を開いて見ると國男が緋の袴に黒モスリンの兵兒帯を締めて室の入口に立つて居る。

「お前だつたのかい、昏々として居ると、誰か入つて來たのが、夢現のやうに分つたから、吃驚して眼を開けたのよ、今何時なの……大層早く起たぢやありませんか」

睡さうな眼色で眺めた。國男は姉の枕邊近く座を占めて。

「餘り早くもないんですよ、もう六時半ですよ……」

「おや、もう六時半にもなるの、私四時が打つまで眠られなかつたものだから、四時から僅かな間眠つたと思つたのに、二時間半も眠つたのかね」

「姉様、園村の家には、姉様位な年頃な女が居ますが何者でせうかね」

言つて照江の顔を見た。

「甚麼様子をした女なの？」

「馬鹿にハイカラがつた色の白い女です」

「へえ……女中のやうな風爲て居なくツて？」

「いゝえ女中のやうな風ぢやないんです、能くは見えないですが、立派な着物に立派な帯を締てるんですもの……」

「へえ、那樣立派な様子をして……それぢや女中ぢや無さうだが……何時何處で見ただの？」

不審相に問ひかけた。

「靴下を干て置いて忘れて居たもんですから、まだ園村では寝むで居るだらうと思つて庭へ靴下を取りに出まして、内へ入りがけに些と二階を見上げたところが、欄干へ毛布を乾して居たんですが、幸ひ先方では氣注かない様子でしたから、熟と眺めて入つて來たんです」

照江は二階で毛布を干て居たと聞いて、さてはと何事か覺つたやう。

「女中の外に那樣女の居る道理が無いんだから、女中で無いとすれば、奥様を貰つたのかも知れないわね」

「然うでせうね、然う仰やれば、何だか細君らしい所もあるやうでした」

「顔は何ういふ顔か分らなくて；」

「色は莫迦に白い女でしたが、顔は判然見えなかつたんです、ですけれど、確に女中では無いと思ふです」

「雪子の姿見えなくツて？」

「は、外には誰も見えなかつたです」

言ふ中に七時の時計が鳴つたので國男は室を去つて了つた。照江は起出る勇氣もなく枕に就いたまゝ清らかな眼を瞭然と開けて國男の告げた女に就て想像に耽るのであつた。

「屹度妻を迎へたに相違ないが、何處から貰つたのか知ら……可愛さうに、雪子は到

頭繼母の手に掛るのかね……妻を迎へるのは當然な事だけれど、ごうか雪子を可愛がつて下れる人だと可いけれど、國男の話したやうなハイカラな女だと、小兒なぞは必然邪魔者扱にするに極つてるわね……それに彼の兒が人並優れて伶俐者だから、繼母と云ふ事を知つて、母様母様と懐慕かないに極つてるからね……吁々……何うして次へくと心配事が出来るのか知ら……」

百十三

某日の午後であつた、歌子は良人の歸宅時刻に間がないので、鏡臺の前に座つて、美しく紅粉を粧ふた後、合鏡に頭髮の格好なぞ眺めて、二階へ上つて来た、寸時く欄干の際に立つて、やゝ色附初た庭樹の梢を眺めて、如何にも楽しさうな様子であつたが、良人の室で何か弄つて居るやうな物音が聞えるから、不思議に堪へぬので、密と障子を開けて見ると、何時の間にも上つたものか雪子が唐木の机の前に座つて、頻に何か悪戯書をして居る、見るより歌子は駆け寄つて。

「雪ちゃん、お前お父様のお机の前などに來て何悪戯爲てるんです……本當にお前

んは女の兒の癖に、悪戯ばかりして爲様がありませんのね、お父様のお机の前に来て、筆や墨を弄くると、母様がお叱りを受けるんですよ、宜ごさんすか、これから此處に上つて來て、お悪戯をすると、酷い目に合せますよ」

聲荒らかに叱責した、雪子は直に筆を放して、蕩けは爲ないかと、思ふほど愛らしい瞭然とした眼を、パチ／＼爲せて悪い顔をして居る、歌子は再び聲を荒らげて、

「はいと、何故お返辭を爲ないんです……早くはいとお返辭をなさい」

「今から爲ませんから、どうぞ堪忍ちて頂戴」

「たいげな手を支いて詫つた。」

「ちや、今日だけは堪忍してあげるから、これからお悪戯をすると承ませんよ」

「はい」

「では早く階下へ往らッしやい」

雪子は會心の遊戯を爲つゝあつたのに、歌子のために妨げられたのみならず、嚴しく叱り附けられたので、止を得ず訛言は述べたものゝ、心の中では不平で堪らなかつた様

子が見えた、けれども悄悄として歌子の言ふがまゝ、階下へ降りて往つた、其妻を見送つた歌子は、夜叉の如き眼色をして。

「何と言ふ可厭な兒だらうね、吁々……彼の兒さへ居なかつたならば、甚麼に娛しい事だか知れないのに、思ふやうにならないもんだね」

呟きつゝ、時計を眺めると、もう僅か十分で三時になるから、慌て、階下へ降りた。雪子は先刻叱られた事は、忘れたやう、書生室で優しい聲で唱歌を謡ふて居る。歌子は階下へ降りるには降りたものゝ、まだ良人が歸つて来ないために、又化粧室へ入つて、鏡に對して、己が風姿を横になつたり、後向になつたりして眺めて居たが、得心したやう室を出かけたが、又鏡の前に来て、鏡臺の抽斗から牡丹刷毛を出して、櫻の花を粉にしたやうな、香の良い白粉を少し附けて、鼻筋のあたりを軽く撫で、這度は心置なく出て往つた。而して玄關頭へ出て往くと、丁度關がフロツクコートに變色チヨツキを着て、獅子頭を彫むだスタツキを脇下に抱込むで、元氣宜く歸つて來たので、溢れるばかり愛嬌を湛へて。

「お歸邸遊しませ」

と、兩手を支いて淑に挨拶した。關も和と笑つて會釋して、手づから靴を脱いで下の六疊へ入つた。此室は例も官省から歸つて來ると、彼男が服装を更める室であるのだ歌子も續いて入つて來たが、關が上衣を脱ぎかけたのを見て。

「貴方お着替なさいますんですか」と問ねた。

「あ、着換るんだよ」

「遅くなりますから、其まゝ往らしては如何でございます」

「何處へ？」

不審さうに言つた、歌子は笑ひながら、

「お忘れなさいまして？」

と顔を見る。關も漸く思ひ浮べたやう、

「然うく、散歩に往く約束があつたね」

微笑を洩らした。

百十四

「私樂むでお待申して居ましたわ」

「それぢや、此まゝ直に出掛ける事に爲やう」

関は脱ぎかけたフロックを又着けて、

「雪子は何うした、秋草が盛だから連れて往つて遣つては何うだね」

「まあ小兒なんか連れて往らッしやるんですか……折角お松と唱歌なんか謡つて、機嫌よく遊んでますから、這度又連れて往けば宜いちやございませんか」

「だつてお前、草花が綺麗だから歡ぶだらうと思ふて……お松も一緒に連れて往けば宜いちやないか」

「でも貴方、これから雪子に衣物を着替させたり、お松の支度するのを待つてましたら、日暮方でなくちや出掛けられなくなりますから、今日は兩人きりで參らうぢやございませんか、私散歩に出かける時なぞ、小兒連れて居ては、樂に往くのだから、

苦に往くのだから、知れない心が爲ますわ」

不服らしく言つた。関は親子一緒に楽しく散歩する意であつたから、歌子が雪子を邪魔物扱にする辭には、甚だしく不愉快を感じて、雪子の行末を杞憂するのであつた。けれども厭がるものを強て連れて往くは、却つて不快を増す基だと思ふたので、

「然うだね、那樣に支度爲なきやならないのなら、時刻が早くないから兩人で往つて歸る事に爲やうね」

心の不愉快を色にも見せず、寧ろ快けに言つた。歌子は関の同意したのを非常に歡んで、

「ではもう三時半になりますから、直に出かけませうね」

「お前の支度は可いのかい」

「は、私これで宜ござんすわ」

「それぢや出かける事に爲やう」

歌子は、留守を女中のお菊に頼み置いて関と共に家を出た、が歌子は理想の戀人、外

交官中での美男子を、己が良人として、かく打連れて歩くのは、娯と云ふよりも、寧ろ世間への誇として居るので、關の傍に寄り添ふやうにして、絶えず微笑を含んで、種々な事を話しかけるのである。

「貴方英國に居らつしやる頃は、散歩なぞなさらなくつて？」
關は笑ひつゝ、

「英國に居たつて、散歩には出かけるさ、日本の公園のやうな、小ぼけな汚ない公園でないから、寧ろ内地に居るよりか、度々出かける位なものだ」

「散歩にお出かけなさる時は、お一人なんですか」

「一人の時もあれば、友人と一緒に出かけける事もあるさ、けれども、先づ一人で出かける事が多いね」

「お一人お出かけなさいましても、御愉快ですか」

「そりや面白いさ、公園に行けば、知己の紳士や令嬢が、必ず二人や三人は何時も来て居るから、一人で出かけたつて、退屈するやうな事は無し、設令知つた人が遊に

来て居なくつても、今日の日本人は、歐米人と同等に幅が利くから、何處を歩いて居たからつて、愉快なものさ」

「私共のやうに、夫婦で歩いてる方もあるでせうね」

「日本人でかい」

「はあ」

「そりや在るとも、妻君を連れて往つてる人は、皆な手を組交して歩いてるさ、彼地で離れ〜に歩いて居ると、却つて愛情が無いと言つて笑はれる位なものさ」

「本當に彼地は開けて居て宜ごさんすわね、這度外國へ赴任なさるやうな事があれば是非連れて往つて下さいましね」

百十五

園村夫婦は、語らひながら靈南坂を下つて東伏見宮家の裏通に出て、虎の門から内幸町へ、やがて日比谷公園に入った。關は葉巻に火を移して喫しつゝ、

「外國へ赴任するやうな事になれば、都合で連れて往つても宜いが、しかし、這度急に

召還されたのは、選抜して召還爲たと言ふ話だから、先づ三年や四年は外國へ遣られるやうな事はあるまいと思ふのだ」

「だつて大臣へお願になれば、往けない事はないんでせう」

「大臣へ話したところで、政務局に必要なだからこそ召還したんだもの、なか／＼容易に承入れて下れるもんぢやないさ」

語りつゝ、躑躅ヶ岡に出た。而して四阿の前に突立つて、運動場を見渡して居つたが、

氣の清い秋の夕暮は、なか／＼に漫歩の客が多いので、寸時は惚乎として眺めて居た

「倫敦あたりの公園とは比べ物にならないでせうけれど、東京には公園らしい公園がありませんから、随分遊びに来て居ますわね」

歌子が言つた。

「東京の中央にある公園地としては、こればかりの人では、餘程尠ないのだよ、公園の設備が不完全なからでもあらうが、市民一般が公園地の趣味が解らないのかも知れないね」

「では英國邊の公園はいつでも賑はつてるんですか」

「第一公園内の道路からして比較になるもんぢやないが、日曜日は別として、普通の日だつて、三十間の車馬道は、馬車や自動車で通行が能ない位だからね、其の賑かな事は辭や筆で言ひ盡せるものぢやないさ」

「まあ那樣に賑かなんですかね、私眞筒往つて観たいんですよ」

「世界第一の都會と、この不完全の東京の市街とを、公園に限らず比較するのが間違つてるのだから、日比谷公園は、日比谷公園として観るより外はないさ……ぶら／＼草花の咲てる方へ往かうぢやないか」

微笑しつゝ言つた。

「運動場を抜けて参りませうか、噴水池の方から参りませうか」

「運動場を抜けたつて趣味も無ささうだから、彌張噴水池の方から往かうぢやないか」

「では、此方から下りませう」

歌子が先に立つて、小高い岡の上から降りて、噴水池の方へと歩み出した。関も後から降りて、やがて又推並んで池の端を右へ、松本樓の背後へ出て、花園の中へと入つた。園内は秋の七草は言ふまでもなく、芙蓉や菊の花が幾十種となく、咲競ふて、春の野邊に咲く草花よりも、遙に趣が深い、兩人は徐々と歩みつゝ眺めて居たが、日は殘照を園樹の梢頭に投げて、西の端に沈みかけて居る。

「どうだ、もう少し早く観て、松本樓にでも入つて晚餐を済して歸らうぢやないか」
関が言ひ出した。

「は、何だか樹立の中は薄暗くなつて參りましたわね、早く観なきや観えなくなるかも知れませんか」

歌子も同意して、何程か急ぎ脚に歩み出した。すると行方から、洋装と和装との兩人連の青年紳士が、巻蓑を喫しながら悠々と歩むで來るのに行會つた。歌子は洋装の紳士を見ると、何故か顔色が眞青に變つた。

百十六

洋装の紳士は誰か、歌子の顔色を眞青にするも無理からの事、外ならない歌子の情夫であつた、彼の柳下卓次郎であつた。柳下も歌子を認めると、眼に憤怒の色を示して、射るが如くに睨付けた。けれども右腕に資産家の子息と言ひ、米國へ留學して歸つたほどの紳士であるから、友人の手前もあり、殊に歌子も何者かは知らぬが、風采の卑しからの青年紳士と同行して居るから、言ふべき辭を沈と堪へて、無言のまゝ行過て了つた。歌子は漸く虎口を遁れたので、関へ知れないやうに、ホツと溜息を吐いた。

夕氣立つた風が、萩や薄の穂を撫で、戦戦と吹き渡る。

「何うだ、這度の日曜に再來るとして、花はこの位にして置いて、晚餐を食へに往かうぢやないか」

関が鼻眼鏡を拭きながら言つた。

「はい、薄暗くもなります、風も出て來たやうですから、晚餐を召上りますんならば直にお供致しますわ」

とは答へたが、柳下の眼色が餘りに可怖かつたゆめに、胸の動悸がなかくに治らないので、其聲は蚊の鳴くやうに力の無い、小さい聲であつた。

「何うしたんだ、大層勢の無ささうな聲を出すぢやないか、あれつばかり歩いて、もう疲れたのか」

言ひつゝ、歌子の顔を見たが、大變に顔色が悪いので、驚いたやう。

「お前加減が悪いのぢやないか、大層顔色が悪いよ」

問ひ試みた。歌子はハツと思つたが、

「いゝえ、何所も悪かあないんですが、少々ばかり頭痛が致しますから、其故かも知れませんか」

と答へた。

「それぢや晚餐を食べに入るのは止て、直に宅へ歸らうか」

「いゝえ、痛いと言ふほどではないんですから、何方へでもお供爲ますわ……」

「然うか、それぢや直に入る事に爲やう」

夫婦は打連れて松本樓へ入つた。

さても其後柳下は、逢たい逢たいと思ふて居つた歌子に行會ながら、辭を交す事が出来なかつたので、非常に残念に思つたが、止を得ない事と諦めて、何氣なく友人と共に遊戯場の方へ歩を進めた。すると友人は柳下に對つて、

「君は今行會つた婦人を知つてるのか」

意外な事を問ひかけた。

「何故？」

「何故と言ふ理由は無いが、君の顔を見ると何とも言へない變な顔色をして俯向いて了つたからさ」

「ぢや君は彼の婦人の顔色の變つたのが分つたのか」

不思議さうに言ふ。

「分つたかとは侮辱極るぢやないか、我輩の爛眼は常に君も知つてる癖に……」

「然う君に看破された上は自白するがね、彼の女は知つてるも知つてるも、非常に親

密に爲てる女だ」

「何うも然うだらうと思ふたよ、一體彼女は何者だ」

百十七

柳下は笑ひながら、

「何者か、君の炯眼で言ひ當て見給へ」

「然うさね、何所かの令嬢は令嬢に違ひないが、君が親密に爲てるところを見ると、餘り貞淑な女ぢやないね」

「我輩が親密に爲てるからツて、貞淑な女で無いとは侮辱も甚だしいぢやないか……しかし、まあくそれは須く恕して遣るとして、令嬢と相場を極て了つたのは、何か理由があるのか」

「は、は、何有別に理由はないが、苦勞人ならばもう少し、驅の何處かに卑しい、粹な所がなくぢやならない筈だが、扮装こそ其者上りのやうな作を爲て居るけれど争へない事には、堅氣の令嬢は、何處かに野暮な、垢抜の爲ない所があるから、一

目見れば直に知れるさ」

「太く通がつた事言ふぢやないか、しかしそれほど観察が能るなら、今の兩人は何う言ふ關係な中か、それを聞きたいもんだね」

「那樣事は聞くだけ野暮ぢやないか、關係も何もあつたもんぢやない、夫婦に極つてるぢやないか」

「それは又何う言ふ理由で分るのだ」

「だつて、苟にも良家の令嬢であるとしたらば、衆人の歡樂場たる公園なぞに、供をも召連ないで、若い男と唯二人、出て来る筈もなし、設令又相愛の間柄かなんかで宅の首尾を作つて出て來たとしてもだね、甚麼人に出會はないとも限らないのに、あの通り軀と軀と密接するほど、傍へ擦寄つて歩けるもんぢやないさ、平氣で押並んで歩いて居る一事は、情夫でも無ければ、兄妹でもない、確に夫婦である事を證據立て、居るぢやないか」

岡子に乗つてペラ／＼喋舌る。柳下も成程と思ふた様子で、

「成程君は感心に旨い事を言ふよ、通常の者は唯漫然と答へるんだが、君のは一々理由があるから面白い、實は彼の女は、君が想像の如く、眞箇某良家の令嬢だがね、ツイ二ヶ月以前までは、結婚も何も爲て居なかつたんだが、今の状態を見ると、何うしても夫婦とよしか思へないので、それがために君の感想を聞いて見たんだ。どうもあの様子は夫婦に相違ないね」

「夫婦に相違ないとも、我輩が確に保證する」

「夫婦に相違無いとすれば、いつ結婚爲たのか知ら……」

不思議相に首をひねりながら歩むで居たが、

「早速一つ探つて見てやらう、結婚先は何う言ふ家か……」

「太く神経を悩ましてるね、さては悩ますべき理由があると思えるね」

和り顔を眺めた。

「何有我輩は然う言ふ深い理由は無いんだが、親友の意中の戀人であつたから、それで探つて遣らうと思ふのだ」

「とか何とか旨く辭柄を設けたね、は、は、は」

語る中に遊戯場に出た。黄昏の空は澄み切つてこそ居るが、叢に鳴く虫の音さへ聞えて、いと陰鬱であるに拘らず、まだ大勢の人が集つて、種々の遊戯を試みて居る、兩人は暫時突立つて眺めて居つたが、

「どうだ精進軒へ晩食を食べに往つて、日勝亭で一ケーム突かうか」

柳下が言ひ出した。

「それも宜からう……」

兩人は直に遊戯場を去つて、京橋方面へ往つた。

百十八

園村夫婦は松本樓で晩餐を済して、やがて歸つて來た。而して閑は書齋に、歌子は己が室へ入つた。が、歌子は不意にも公園で柳下に出會つたために、忘れて居つた古疵の痛むが如く、恐怖と嫌厭の念に閉ぢられて、折角の散歩を非常な不愉快に了つた。しかし關へ對して不快の顔を見せるは氣の毒と考へたから、夕食を食べる間は努めて

笑顔を見せて居たけれども、歸宅の後も、柳下の怖るべき眼が、眼の前に隠れて、忘れやうと思ふても忘れる事が能なくて、子然と苦悶に沈むのであつた。

「あの顔色では大變怒つてる様子だが、何うしたら可いか知ら……園村夫人に成れるのが分つて居たらば、那麼人と關係するのぢやなかつたのに、本當に残念な事して了つたね。しかし考へて見れば、柳下の怒るのも、元を質せば私が悪いので、あゝ言ふ約束なぞ爲なきや宜かつたのだ。行末は夫婦に成つて下れないかと云ひ出されたので、可厭とも言ひかねたから、ツイ約束して了つたものだから、それで那麼怖い顔して怒るんだわ……そればかりぢやない、密會爲たいと言つて、再三再四書面を寄來したのに、何時も何時も斷つて遣つたから、其事に就いても立腹爲てるのかも知れないわ……園村と一緒に歩いて居たのを、何と思ふて見て居たか知ら……結婚爲たのだと察したのか知ら……それとも誰か知つた方とでも散歩爲て居るのだと思つたか知ら……豈夫まだ結婚爲た事は知る道理は無い筈だがね……若も一人で散歩でも爲て居やうものならば、甚麼酷い目に遭はされるか知れないから、この後は

妄に外出も能ないが、寧ろ會つて事情を打明けて、關係を斷つて貰はうか知ら……いや、事情を打明ければ、腹立紛れに甚麼目に遭はされな限らないし、あゝ言ふ性質の男だから、飽まで關係を斷たないで、不倫な事を強るかも知れない……以前のやうに冷たい愛情の無い家庭ならば知らない事、今日では理想の戀人と結婚して、楽しい家庭を作つて居るのだから、道ならない事なぞ爲る心もなければ、固より爲て濟む理の事でもなし、彌張此まゝ知らない顔で會はない用心するが何よりであらう……半歳か一年顔を見せないで居れば、譬へにも男心と秋空と言ふから、屹度他に愛情が移るであらう……何う考へて見ても、それより外に良い方法はない……」

我と我が胸に問ひ胸に答へて、苦悶の太息を洩らすのであつた。が、やがてまた如何にも悔悟したやう、

「守るべき道は守らなきやならないものだね。柳下とあゝ言ふ關係の出來た頃は、さほど不倫の事とも思はなかつたが、今日と言ふ今日は、眞箇貞操の大切な事が、轟

々と胸に應へた。若も柳下に結婚した事でも探られて、可厭な事でも言ひ出された節は、何う辯疏すれば宜いか知ら……吁々この後は甚麼脅迫を受けても、守もるべき道だけは堅く守らなきやならなねい」

決心の色が見えた。

夜は静寂に、電燈の光のみ輝き渡つて、女中室の邊で、時々微かな聲が聞える。

百十九

園村が轉宅して來てから二週間ばかり經つてからであつた。照江は病氣がやゝ輕快を覺えたので、久し振に床を離れて、女中のお時に手傳はせて、束髪を結び替て居ると表格子をガラ／＼と排けて、物をも言はずに入つた人がある。お時は襷掛のまゝ、

「誰方でせうね、入口の格子が排たやうでしたが……」

言ひつゝ、玄關口へ出やうとすると、照江が心注いたやう、

「今日は土曜だから、國男が歸つたんだと思ふがね」

注意した。お時も成程と氣が付いたので、

「左様でございしましたね、では若様がお歸り遊ばしたんでございませう……」

又結髪の手傳を始めた。かゝる折しも、間の襖を排けて、

「唯今……」

と國男が入つて來た。照江は鏡臺に對つたまゝ、

「土曜日と言ふ事をすつかり忘れて居たものだから、お客様かと思つて、お時が玄關

へ出掛けたのだが、俄に氣が注いて舍した所なのよ」

と微笑むだ。

「おや然うでしたか、それは滑稽でしたね。御免下さいとも言はうものなら、無論

出て來るのでしたね」

するとお時が笑つて、

「いゝえ、お辭をお掛けになれば、直に分りますから、却つて沈着いて居るのでございますが、黙つて居らツしやいましたものですから、ツイ出懸ける所だつたのですよ」

「旨く言つてるね、其中に一度試して遣るから、欺されないやうに爲るが可いよ」
 「那樣事仰やれば注意致しますから、大丈夫でございますよ」

「どうだか、まあ精々注意爲てるか可いさ……」

言つて更に照江に對ひ、

「姉様、髪なぞ結つて居なさるが、少しは快いんですか」

問ねた。

「は、今日は大層気分が快いものだから、髪を梳いて貰つてるのよ」

「然うですか、それは好い鹽梅ですね……では僕がお聞かせ爲たい事がありますから、髪が済むだら知らせて下さい」

「然う、もう直に済むから、済むだら知らせるわ」

國男は姉の室を出て、己が書齋に入つて制服を和服に着替え、机に對つて書見を始めた。物の十五分も経つたと思ふ頃、お時が室を排して、

「済みましてございますから、入來ッしやいませと仰やいましてございます」

と告げた。

「然うか」

國男は直に姉の室へ往つた。

「やあ、病人らしく無くなりましたね」

元氣宜く言つて座に着いた。

「豈夫髪を結つたからツて、那樣に變りも爲ないでせうよ」

と微笑して、

「お前何か私に聞せる事があるツて言つてましたが、甚座事なの」

問ひかけた。

「外の事ちやありませんがね、園村の家の戸籍調を爲て來ましたから、それを話して上げやうと思つたのです」

「まあ、何うして調べたの！」
 と眼を睨つた。

百二十

國男は和々笑ひながら、

「實は彼の束髪の女が、何者だか正體が分らないものですから、何うかして知る方法は無いか知らと、種々考へた末に、派出所へ往つて、巡査に聞くのが一等捷徑だと思ひましたから、唯今歸りがけに派出所へ寄つて、巡査に問ねて見ましたところが、叮嚀に聞かして下れましたから、悉皆詳しい事が解りましたよ」

「まあ、お前は随分思ひ切つた事を爲る人だね。して彼の女の素性が分りましたか？」
「分りましたとも、詳しい事が分りましたが、驚くぢやありませんか、彌張姉様の想像通り兄様の妻ですよ」

「それはもう妻に極つて居るけれども、何處から來たのか、那樣詳しい事は知れないんだらうね」

「いや知れない事はありません、それも知れましたが、驚くと言ふのは其事です、一體何處から來たと思ひます……姉様お逢なすつた事は有か無いか知らないけれども」

それ小林の姉様が能く話して居た、相川の娘の歌子と言ふのですよ」

「え、ッ……では相川の歌子様を貰つたんですか……へえ……驚きましたね……」
呆れたやうに言つたが、忽ち日外國男が拾つた書面の事を思ひ出して、

「それで漸く解つた事がある、日外お前が私の荷物を作る時に、宛名の無い書面を拾つた事があるでせう……あの書面の受取主が、彌張相川の歌子さんで、小林の姉様が認めなすつたものに相違ないわ」

「それは又何う言ふ理です？」

「何う言ふ理と言つて、小林の姉様夫婦はお國に居る頃から、相川様の引立を受けて居て、相川様に連れられて東京に來たほどの深い縁故のある中だから、屹度歌子さんから兄様の妻になりたいとでも話があつたために、それなれば照江を離縁して、貴女のお希望を叶へて上げませうと言ふ様な、約束があつたのかも知れないわ……何故かと言へば、あの書面の中にこれにてお約束の端緒相開け候間、御安心被下度と書てあつたでせう、あの時は何の約束だか、少しも考が附かなかつたけれど、歌

「子さんが園村と結婚された所から考へると、どうも然うと爲さや思へないわ」

「なるほど然う聞けば、或は然う言ふ悪計が回らされて居たかも知れませんが、して見ると、歌子さんの希望を遂げさせるために姉様の一生を犠牲に爲たんでせうか」

「確に然うとは言へないけれど、然う思ふて考へると、どうも然うぢやないかと思はれるのだ、國から入來した母様が、上京された當時は、それはく優しい田舎風の方だつたのに、小林の姉様が入來しやるやうになつてから、俄に私への様子が變つたところから見ても、私の一生を犠牲にして、歌子さんのために盡されたのかも知れないわね」

「へえ……それが事實とすれば、實に言語同斷の話ですね……だが歌子さんを貰つたところから推察すると、或は事實かも知れないですね。兄様は知つてるんでせうか」

「兄様に御存じないんですよ、那樣奸策がある事を知られたなら、何で歌子さんと結婚されるものですか。無論知らないで母様や姉様に勧められて貰はれたに相違あるまいと思ふわ」

百三十一

國男は憤慨に堪へぬ顔色で、やゝ肩を聳やかして、

「それが果して事實であるとすれば、僕は兄様に會つて、小母様や小林のお姉様の奸謀を許して遣りませうか知ら……」

「お前何を言ふのですか、假令それが事實であるとしても、私が離縁されない以前なれば左に右、今日では關係を斷つて、赤の他人になつてゐるんですもの、那樣事を許したところで、私の身に利益があると言ふではなし、徒に他の家庭を擾亂すやうなものだから、必ず那樣事を言ふものぢやありませんよ」

戒めるやうに言つた。

「だつて罪も無い姉様を、散々苛めた上に難癖を附けて離縁爲たんですもの。復讐に許いたつて管はないぢやありませんか」

忌々しさを言つた。